532-2541
1200501498091
32
2541

帝國圖書館藏

鳥山喜一著

支那小史

黄河の水

東京 刀江書院

昭和三年一月一日 登録

5532
2541

此の書を手にされる方々へ

此の小著は昨年始め舊友大和君の經營した彌圓書房から出版した「黄河の水」の變身であります。一年餘りで三版を重ねましたが、大和君が其の事業から身を退くことゝなつたので、尾高氏の好意で、同氏の刀江書院から、改版して茲にまた世におくることゝなつたものなのです。書名ももとのやうにしましたが、たゞ内容を一見して明にするため、今度は「支那小史」といふ名を冠らせることゝしました。

私が此の書に於いての試みは、支那の文化史的發展のあとを、最も平易な用語と叙述とで、少年にもすぐに諒解し得る程度に通俗化し、然もそれによ

つて支那の正しい觀方を導く一つの手段にもといふのにありました。尤も通俗化といひましても、逸話や傳說の寄木細工をして、能事了はれりとする、いはゆる少年物とは道を異にしました。かくいへばとて、傳說や逸話を決して斥けたのではありません。時には却てやゝ誇張したる形に於いてさへ、之れを利用もしたでせう。また私は極めて通俗化したる叙述の中にも、高い史觀からの批判を忘れなかつたつもりです。

此の書の最初の版の序文の中に、私はこれを「成人の讀物としても無意義でないのみならず、從來は受驗準備書のみで、一般的讀物には、殆ど缺けて居たといつてもいゝ位な、此の方面の缺陷を、幾分は補ひ得るであらうとさへ、ひそかに信じて居るのです」といひましたが、事實、これはかなり教養ある成人に迎へられたことは、前出版者や著者の許への來書を通して知ることが出來ました。それは却て少年物としてではなくさへ、取扱はれました。

私は特に少年のためにする序文を書きませんが、此の書を手にされたる方方は、是非これを更に其の子女へおすゝめあらんことをお願ひします。

此の書は挿畫に於いても非常な注意を拂ひました。少年のための歴史書——日本史、西洋史——には、少しく挿畫を加へるものが見えては來たやうですが、全く歴史に無理解な畫家の手すさびや、低級の製版で事をたさうとして居る傾きが少くないやうです。私は歴史教授に實物や參考資料（圖版の如きものでも）の提示を常に主張するものでありますから、書物の上にもその忽にされるべきでないことを確信して居ります。此の點で恐らく出版界の一新例を開いたともいへませう。それらはすべて信憑するに足る資料によりました。中には支那人の物の見方、考方などを示す方便として用ゐたものもあります。それからやゝ偏しすぎた程に、多くの美術殊に繪畫の寫眞を入れ

たのは、支那文化の精神の一解釋を、これによつて試み度いと思つた意向もあつたからです。

此の小著に「黃河の水」と名づけたのは、黃河は實に支那のシムボルであるともいへるからです。

黃土層に特色づけられた此の河の、其の長い廣い流域の變化にも似た支那の社會のすぎこしあと。その深い底にひそむ知られざる力にも比すべき、支那民族の內に包む力。その遠き遠き河源にも擬すべき、支那文化の淵源——。さういふ上から見て、支那歷史の題號に、此の名を選んだのであります。

私が最初の原稿に筆を染めてからの一日、尋常三年になる長女が「お父さんがお話の本をお書きになるなら、私が畫をかきませうか」といつたので、

それも面白からうと、それをまかせた。畫は支那の芝居人形で、歷史は芝居のやうであるといふ意味からのものです。題筌の文字も書かせました。見返しの畫は十年ばかり以前の私の旅行のスケッチからとつたもので、津浦線鐵橋附近の黃河です。

私は餘りに勝手に、自畫自讚の不遜の言葉を弄したかも存じません。然し此の書はとにかく新しい試として、心ある人々から迎へられたことは事實でした。今、尾高氏の好意によつて、改めて公にすることとなつたのに當り、前版の不備と思つた點を修訂し、最近の史實を增補し、挿畫を改廢增加することゝしました。

然しまだ〳〵恐らく多くの缺點もありませう、足らざる所もありませう。大方の指示を蒙つて、少しでも完きものへと近づくことは、著者の心からの

願ひであります。

昭和二年明治節、改版の成らうとする日

鳥山喜一

支那小史

黄河の水

目次

此の書を手にされる方々へ

古代の話

一 黄土を舞臺に――(傳說の時代)――

穴居の民……一
指南車……四
文字の發明……六
大洪水……一〇

二 天命の動き——（夏殷の時代）——
酒の罪……一五
象牙の箸……一八
三 聖人と大盜——（周の時代）——
上手な釣人……二三
覇者の爭ひ……二六
聖人の出現……三一
强者の天下……三五
食客と學者……四〇

中世の話

一 萬里の長城——（秦の時代）——
大皇帝……四五
萬里の長城……四八
虞美人草……五一
二 沙漠をこえて——（前漢の時代）——
男まさりの皇后……五六
土產の葡萄……五九
不老の神藥……六四
美人の嘆き……六七

軍用飛行機……七〇
三 ローマへの道——（後漢の時代）——
佛陀の福音……七四
紙の發明……七七
ローマへの道……八〇
赤ん坊皇帝……八三
四 北方の嵐——（三國時代から兩晋南北朝時代）——
水魚の交り……八九
竹林の七賢……九四
北方の嵐……九八

索虜と島夷……一〇二
筆の力と信仰の熱……一〇七
五 太陽の輝き——（隋と唐との時代）——
大運河……一一四
日沒する處の天子……一一七
民は國の本……一二〇
老女の卽位……一二四
美人と惡將軍……一二七
太陽の輝き……一三二
兵士の我が儘……一三八

近古の話

一　論語の活用――（五代と宋との時代）――

纏足の始り……一四三
論語の活用……一四七
拗ねもの大臣……一五一
恥の鐵像……一五六
畫筆の誇……一六一

二　蒙古風――（元の時代）――

少年酋長……一六七
惡魔の天降り……一七〇

蒙古風……一七三
チバングの島……一七七
石の下にも若草……一八一

三　新世界からの光――（明の時代）――

永樂錢……一八六
八幡船……一八九
皇帝の悲み……一九三
キリスト教の福音……一九六

近世の話

一　眠れる獅子――（清の時代）――

目次

辮髪の強制……二〇一
獅子の雄姿……二〇四
四庫全書……二〇八
阿片の禍……二一二
落第生の謀叛……二一六
弱い者いぢめのヨーロッパ……二一〇
一寸の蟲にも五分の魂……二一五
秘密結社……二一八
黄龍旗を倒して……二二一
看板のぬりかへ……二二七

二五色旗の下にて——(現在の支那)——

霧の中の光……二四一
國恥紀念日……二四六
青天白日旗をかゝげて……二五一

挿畫目次

（上にある西洋數字は圖版の番號を示し、下の日本數字は圖版の所在個處を示す。）

古代の話（一頁の前にある挿畫）

1 現代の穴居（本文二頁參照）……一
2 古代支那の貝貨（本文九頁參照）……一
3 神農氏（本文四頁參照）……二
4 帝　堯（本文一〇頁參照）……二
5 夏の桀王（本文一六頁參照）……二
6 殷代の文字（本文一八・二三頁參照）……三
7 殷代の牙角細工の破片（本文一八頁參照）……三
8 周代の銅器（本文一九頁參照）……三
9 周の文王と其の諸子（本文二二頁參照）……四
10 齊の桓公（本文二七頁參照）……四
11 老子と孔子（本文三二・三三頁參照）……五
12 曲阜の孔子廟（本文三二・二〇二頁參照）……五
13 古代支那の戰爭（本文三八頁參照）……六
14 秦王政と荊軻（本文三九頁參照）……六

中世の話（四四頁と四五頁の間の挿畫）

15 八達嶺附近の長城（本文四八頁參照）……七
16 秦の始皇帝の陵（本文五三頁參照）……八
17 長安の現景（本文六一・一三〇頁參照）……八
18 タクラマカン沙漠の現狀（本文六〇頁參照）……九
19 漢代の木簡と帛（本文七七・七八頁參照）……九
20 釋迦降誕の圖（本文七四頁參照）……一〇
21 赤壁の故址（本文八七頁參照）……一一
22 石頭城（本文九〇頁參照）……一一
23 莫愁湖（本文九〇頁參照）……一一
24 南京の鷄鳴寺（本文一〇五頁參照）……一三
25 滿洲に於ける一道觀（本文一〇五・一〇六頁參照）……一三
26 晉の王羲之の筆蹟（本文一〇八頁參照）……一三
27 晉の顧愷之筆女史箴圖卷（本文一〇七頁參照）……一三
28 泰山經石谿（本文一〇九・一一〇頁參照）……一四
29 同所刻字の拓本（同）……一四
30 山西省雲崗石佛寺石窟の一部（本文一一一・一一二頁參照）……一五
31 同所一小窟の菩薩像（同）……一五
32 雲崗石窟の大佛（同）……一六
33 現代の大運河（本文一一四頁參照）……一七
34 同（同）……一七
35 唐の土偶（本文一二九頁參照）……一八
36 唐の吳道子筆釋迦像（本文一三五頁參照）……一九
37 河南省龍門奉先寺の石佛（本文一三六・一三七頁參照）……二〇
38 山西省天龍山石窟の唐代彫刻（本文一三六頁參照）……二一
39 陝西省唐の太宗陵前の石馬（本文一三六頁參照）……二一

近古の話（一四二頁と一四三頁の間の挿畫）

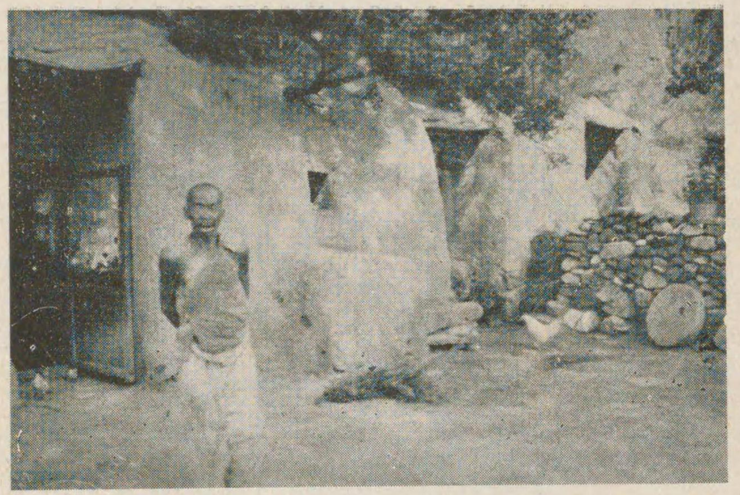
40 纏足（本文一四五頁參照）……二三
41 同（同）……二三
42 宋の故都の遺址（本文一四七頁參照）……二三
43 同（同）……二三
44 宋の徽宗筆鳩と桃（本文一五六頁參照）……二四
45 西湖（本文一五七頁參照）……二五
46 岳飛の墓（本文一五九頁參照）……二五
47 秦檜夫婦の鐵像（同）……二五
48 宋の米友仁筆山水圖卷（本文一六三頁參照）……二六
49 宋の李公麟筆蜀江圖卷（同）……二六
50 宋の馬遠筆山水圖（本文一六四頁參照）……二七
51 宋の梁楷筆踊布袋（本文一六四頁參照）……二八
52 元のチンギス汗と其の四子（一六八頁參照）……二九
53 元のクビライ汗（本文一七四頁參照）……二九
54 宋の文天祥（本文一七四頁參照）……二九
55 元の交鈔（本文一八五頁參照）……三〇
56 マルコ・ポーロ（本文一七八頁參照）……三〇
57 支那の役者（本文一八二頁參照）……三一
58 支那芝居の一場面（同）……三一
59 元の錢舜擧筆瓜と鼠（本文一八四頁參照）……三二
60 元の顏輝筆拾得（本文一八四頁參照）……三三
61 元畫竹林山水（本文一八四頁參照）……三三
62 明の十三陵の石象（本文一八六頁參照）……三四
63 倭寇（本文一九〇頁參照）……三五
64 明の冊書（本文一九三頁參照）……三五
65 明の戴文進筆夏景山水（一九七頁參照）……三六
66 明の仇英筆宮廷風俗圖卷（一九七頁參照）……三七
67 サヴィエールとマテオ・リッチ（本文一九九頁參照）……三八
68 支那化したバイブルの畫（本文二〇〇頁參照）……三八

近世の話（二〇〇頁と二〇一頁の間の挿畫）

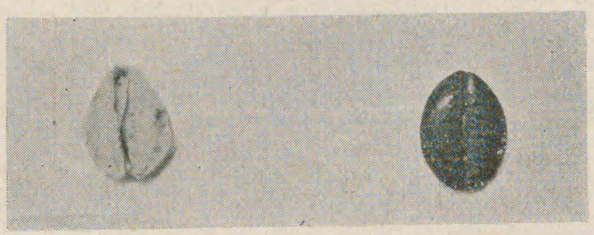
69 清の舊宮城前（本文二〇一頁參照）……三九
70 路傍の辮髪師（本文二〇二頁參照）……四〇
71 阿片吸飲の圖（本文二一三頁參照）……四〇
72 北京の天文臺（本文二一〇頁參照）……四一
73 北京國立圖書館内の四庫全書（本文二〇九頁參照）……四一
74 清の惲南田筆山水圖卷（本文二一一頁參照）四二
75 清の沈南蘋筆鳳凰（本文二一一頁參照）……四三
76 清の郎世寧唐岱合筆花鳥圖（本文二一一頁參照）……四四
77 清の雍正時代の磁器（本文二一二頁參照）……四五
78 洪秀全（本文二一六頁參照）……四六
79 ゴルドン將軍（本文二一九頁參照）……四六
80 ドイツの膠州灣占領紀念碑（本文二二一頁參照）……四七
81 青島の總督官邸（本文二二一頁參照）……四七
82 西太后（本文二二八頁參照）……四八
83 萬壽山の離宮（本文二二八頁參照）
84 同所長廊の一部（本文二二八頁參照）
85 宣統帝（本文二三〇・二三五頁參照）……五〇
86 同皇后（本文二三五頁參照）……五〇
87 袁世凱（銀貨）（本文二三五・二三八頁參照）……五一
88 北京天壇の祈年殿（本文二三八頁參照）……五一
89 曹　錕（本文二四一・二四三頁參照）……五二
90 吳佩孚（本文二四二頁參照）……五二
91 段祺瑞（本文二四二頁參照）……五二
92 馮玉祥（本文二四二頁參照）……五二
93 張作霖（本文二四二頁參照）……五二
94 「五卅事件」の宣傳ビラ（本文二四九頁參照）五三
95 同上女學生の示威運動（同）……五三
96 廣東國民黨本部の集會所（本文三五三頁參照）……五四
97 演說中の蔣介石（本文二四九頁參照）……五四

この時代は、漢民族が黄河の流域で、その最初の社會を作つた大昔の、いろ〳〵のいひ傳への時代から、だん〳〵歴史上の事實が明になり、漢民族の文明が、高められて來た周時代までを含むものであります。

此の間に漢民族は他の蠻族を征服したり、その領土の如きも、初めは黄河流域のほんの一部であつたものが、ずつと廣くなり、周を滅した秦は、今の支那本部の大部分の統一をしました。



（1）現代の穴居



（2）古代支那の貨貝

（1）　古代の漢民族の住居を想像させる穴居は、今日なほ陝西省、河南省、山西省等の地方に見られます。これは山西省雁門關南麓のものです。穴居といつても狐や狸の穴とは違ひます。立派に門や塀をつくつたものもあり、犬や鶏の飼はれて居るのもあります。こゝには紅い花が咲いて居ました。

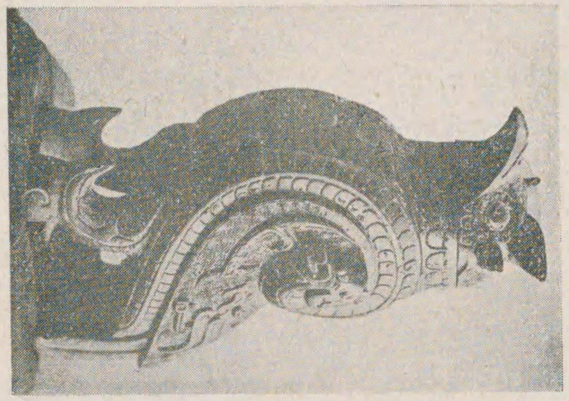
（2）　支那で最も古く使用された貝貨です。側面は こんな風に見えます。後には銅でこの貝貨に象つたものがつくられました。

王桀の夏（5）

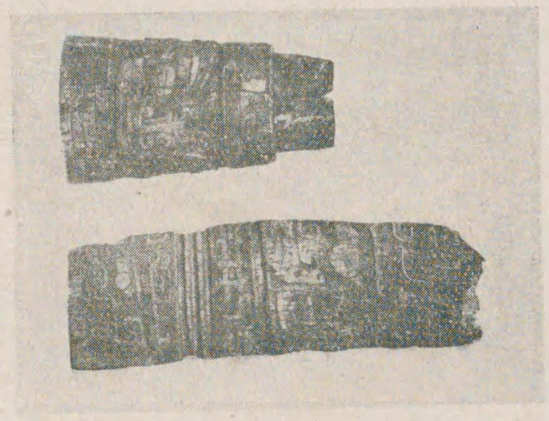
堯　帝（4）

氏農神（3）

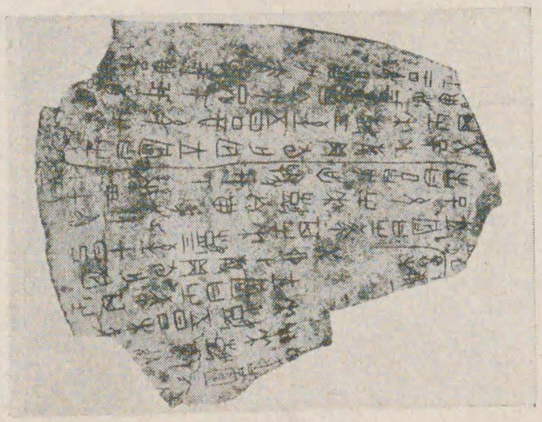
（3）神農氏、（4）帝堯、（5）夏の桀王の像です。これは後漢時代の畫象石（山東省の武氏こいふ當時の豪族の廟所の石室の壁にはめ込んである浮彫）こいふ彫刻からとりました。後の（9）、（10）、（11）、（13）、（14）なども同樣のものです。此の畫象石は西洋紀元の第二世紀の中頃に作られたものですから、この圖像などは、想像のものにすぎませんが、いま殘つて居る畫像的のものゝ、最も古い形式の見本こして出しました。神農氏の手にして居るのは鋤です。



器銅の代周（8）



片破の工細角牙の代殷（7）

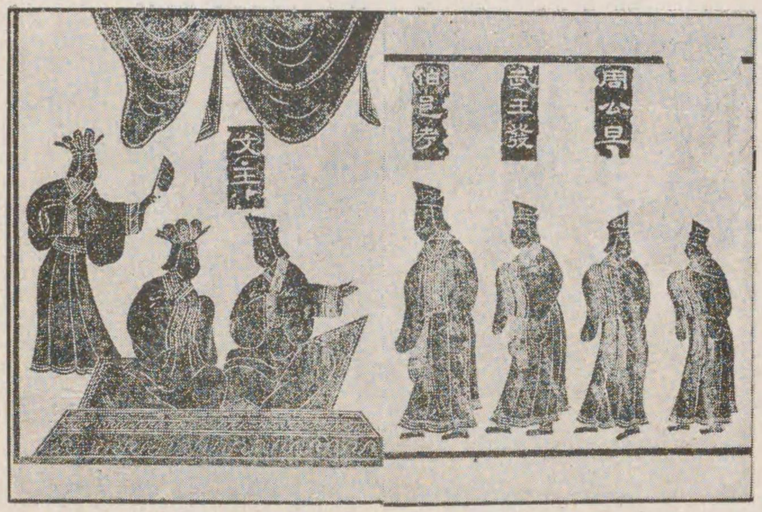


字文の代殷（6）

（6）　これは殷の舊都附近（河南省安陽縣）から掘り出されたもので、文字の彫りつけられた獸骨です。こゝからは同じく文字のある龜の甲も出ます。この文字は現存して居る一番古い漢字の形と申されます。かういふ龜の甲や獸骨は、本文にいつたやうに卜に使つたものです。そのやり方は、卜ふべき事がらを書き記し、裏に火をおくと、その熱のために、表にひゞが出來ます。其のひゞの工合で吉凶を判じたのださうです。

（7）　これも殷の舊都附近から掘り出されたものと傳へられて居ます。大きいものは象牙、小さいのは犀の角。何かの器物の破片です。この彫刻が、（8）の銅器の彫刻模樣なぞと、比較される面白いものなのです。

（8）　周時代の銅器で、尊といふ種類。祭のときに酒を入れるものです。銅器にはいろ〳〵の形があつて、鼎とか爵とかそれ〴〵異つた名があります。この圖のやうに寫實的な動物の形そのものを、器の形としたものもあれば、極めて模樣的になつた鳥や獸なぞをほりつけたものもあります。その他（7）の小さい方に見られるやうな人面みたいなものもあります。（これは饕餮といふ食ひしんぼうの怪物だといふことです）。この銅器の模樣は古代の漢民族の藝術意匠を見る一つの標準となります。



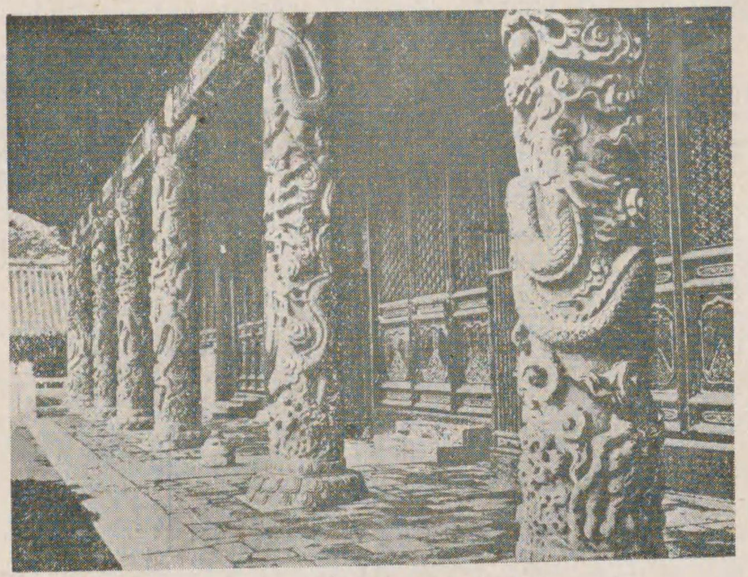
（9）　周の文王と其の諸子

（10）　齊の桓公

(9) 周の文王と王后と其の王子達。文王の家庭はよく治り、いゝ王子達が澤山あつたことは、古い詩などにも歌はれて居ります。圖は前に云つた畫象石によりました。この王子の中の二番目に居るのが武王です。武王が殷を攻めるとき、伯夷、叔齊といふ兄弟の者が、王の馬前に現はれて、臣として君を伐つ不忠を諫めました。然し本文にいつたやうに、武王は殷を滅してしまひましたので、この兄弟は、そんな亂暴な王樣には仕へないといつて、首陽山といふ山に隱れ、山に出來るわらびやぜんまいを食べて生きて居ました。ところが或る人が、今は天下ことゞく、周のものになつたのだから、そのわらびやぜんまいをお採りになるのは、やはり周の祿をいたゞいて生活するのと同じだといひました。二人はさうかとばかり、それからは何も喰べず、つひに餓死をしてしまつたといふお話があります。支那では之れを義人としていひ傳へて居るのです。

(10) 春秋時代の覇者の一人の齊の桓公を、魯の將軍の曹沫といふものが、おどかして居る圖です。齊は魯と戰つてたびゝ勝ちましたので、媾和會議が開かれ、魯は齊に土地をゆづることゝなりました。ところがその席上で曹沫は桓公をおびやかして、その土地をとり戻したのです。圖に曹子とあるのは曹沫です。(これも畫象石から)。

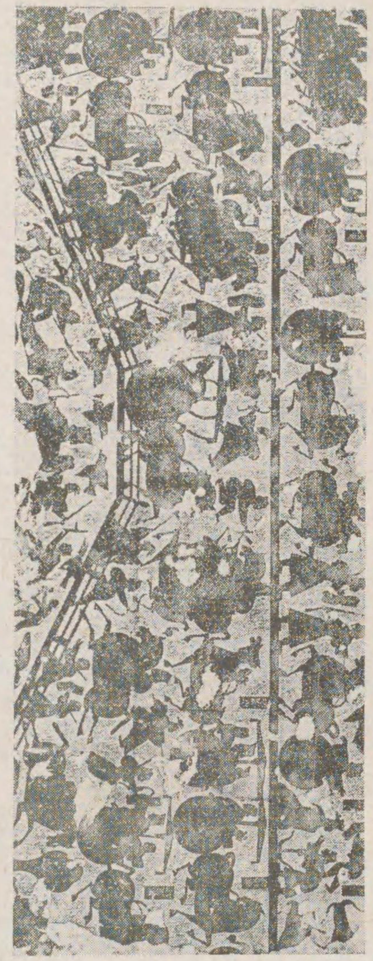
(11) 老子と孔子



(12) 曲阜の孔子廟

(11) これは孔子が老子に「禮」を教はつたといふ云ひ傳へを現した圖です。孔子の手にして居るのは、お弟子入りの挨拶に贈つた雉です。

(12) 山東省曲阜にある孔子のお廟の大成殿です。この建物は清朝の初に出來たものです。前面に見える柱は大理石です。この曲阜は孔子の生れた土地ですが、今こゝには其の子孫が衍聖公といふ稱號を受けて住んで居ます。今の當主はまだ十歳位の少年です。なほこゝには孔子のお墓もあります。



(13) 古代支那の戰爭

(14) 秦王政と荊軻

(13) 支那古代の戰爭の想像圖です。戰車に乘つてる大將、騎馬武者もあれば、弓を射てるもの、盾で防いで居るもの、刀を振ひ、矛をしごいて居るものも見えませう。橋の下は水戰の有樣です。

(14) 戰國時代の燕の太子に賴まれて、荆軻といふ人が、秦王の政（後の始皇帝）を刺し殺さうとした事件があります。荆軻は秦の求めた燕の領地と罪人の首とを獻げることにかこつけ秦王に逢ひ、獻上地の地圖の中にかくした七首で王を刺さうとしました。王はとらへられた袖をふりきつて逃げる。荆軻は七首を投げつける——さういふ活劇を示したのが此の圖です。

この(13)、(14)と前の(3)、(4)、(5)、(9)、(10)、(11)等を比べると、同じ畫象石からのものではありますが、畫象の線やその他の感じが、違つて居るのにお氣がつかれるでせう。それは前の六つは「金石索」といふ本の版になつて居るものからとりましたが、(13)、(14)は畫象石の拓本を直接に寫眞にしたからです。

一　黃土を舞臺に

——傳說の時代——

穴居の民

歷史はちようど芝居のやうなもので、その土地は舞臺、そこにいろ〳〵な活動をした人種は、役者にたとへることが出來ます。支那の歷史の舞臺は、後にはたいへんに廣くなりましたが、始めは黃河の流域のほんの一部分でした。また其の役者も、一番おもい役をしたものは、漢民族であつたといへます。それは日本の歷史の大立物が、大和民族であるやうなものです。

此の漢民族が何處から來たかといふことは、明にはわかつて居ませんが、黃河の上流の地方から、だん〳〵東へ東へと、うつつて來て、その中流域に生活をするやうになつたのだらうといふことだけはいへるのです。そこで大昔の漢民族は、まだ一つのまとまつた大國をつくるといふこともなく、あつちこつちに、小さい部落を作り、獵をしたり、家畜を飼つて居たのです。それから農業をやり、次第次第に文明に進んで來ました。その家といふのは、北支那の一の地理的特色である黃土の層の、切れ目の崖に穴をあけて、それに住んだのです。その生活の樣子も大よそ推察が出來ませう。

この穴居は何千年の後の今日でも、陝西省、河南省、山西省などには見ることが出來ます。

こんな有樣の漢民族が、だん〳〵にその文明を高めて行つた次第を、支那の古い云ひ傳へでは、えらい聖人たちが出て、教へ導いてくれたものとして居ります。有巢氏が出て、穴居その他の、衞生上よくない住居をして居るものに、家をつくることを教へたとか、燧人氏は、まだ火といふものを知らなかつた民に、初めて火をおこすことを教へ、食物を煮たり燒いたりする法を傳へたとかいふのが、その一例です。煮たり燒いたりして、はじめて料理といへるのであるから、支那人は日本の御馳走になくてならないお刺身のやうなものは、野蠻時代のもので、料理の數には、はいらないと申します。これはわき道へ外れましたが、そんなふうに、料理法も覺えて來たのです。また伏犧氏といふのは、家畜を保護することや、いろ〳〵な禮式中には結婚の式のことなどもあります。のことも教へたといふし、神農氏は其の名から

農業に縁あるやうに、農作のことはいふまでもなく、商業や醫藥のことをも教へて、人々の生活を豐にし、幸福を增してくれたといふことです。この中で燧人氏、伏犧氏、神農氏を、三皇といふ總稱で、つたへて居ります。

指南車

かういふ云ひ傳へのあとに出て、初めて支那を統一したのが、黃帝だと申します。黃帝は三皇につぐ五帝――德のすぐれた、天子とも聖人ともいふべき、五人の人々をひつくるめて呼ぶ名稱――の第一の人です。

漢民族が黃河の流域に來た頃には、それよりも前に苗族といふのが住んで居て、爭も起つたらしいのですが、だん〳〵さういふものを敗かして、南方におつぱらひました。黃帝はさういふ仕事をしとげて、漢民族の部落を、一まとめの大きいものに、作り上げた天子として傳へられて居るのです。此の統一は、今からは四千年も前のことだと申します。昔話には黃帝のかういふ事業に、抵抗した相手の一人に、蚩尤といふ怪物が居たといひます。それは、頭は銅で額は鐵、おまけに四目六手といふのですから、恐ろしいものです。これが戰になると、雲や霧を起して黃帝を苦しめる。方角が分らないので、黃帝の方はたび〳〵よわりましたが、帝もさるもの、つひに指南車を發明して、どんなひどい雲や霧につゝまれても、すぐそれによつて方向を知ることが出來たといふことです。この

指南車は今の磁石と同じもので、支那ではこんな大昔から、之れを使つて居たといふ學者もありますが、然し指南車と磁石とは同じものでは御座いません。

それはさておき、黃帝の時には、宮室も營まれ、役人の制度も整へられ、曆も出來れば養蠶のことも始められたといはれるし、舟も車も、その他日用の器具器械の發明もあつたと傳へられます。つまり、これは漢民族の生活が高められ、政治も整つて來たことを意味するのです。

文字の發明

かゝる文明の進みの中で、最も大切なのは文字――私共のいふ漢字――の發明です。それは蒼頡といふ人が、鳥獸の足あとを見て、つくつたといふのですが、これも一人の仕事ではなく、何代も何代もの間に、だん〳〵に作られ、ひろく行はれて來たのを、えらい人の發明として、分りいゝやうに傳へて居るのでせう。

漢字の組立と使ひ方には、六通りあつて、それを六書といひます。

象形　天地動植物器具など、その形をうつした繪文字です。字引の扁や冠になつてゐるのは、多くはこの種類のものです。

指事　ある事物を指し示す字です。一二三もこれです。上(一、丄)下(一、丁)の如き一定の位置を示す一の上下にしるしをつけて、その上か下かを明かにしたやうな文字はこれです。

形聲　一方はその文字のもつ意味、一方はその發音を示す文字との二つの文字の組合はせの字。同じ魚でもいろ〳〵あるから、魚に里、周、付などをつけて、鯉、鯛、鮒などと區別する類です。

會意　二つ以上の文字を組合はせて、一つの新しい意味のある文字をつくるのです。木が多く立ち並んで居るので林とか、日が地平線上に上つて來た意味で、旦をつくるとかゞこの例。

轉注　これと次の假借とは使用法から來た分類のものです。轉注は本來の字の意味を引きのばして、似よつたものに應用したものです。たとへば金は金屬の總名ですが、それから金屬の中では一ばん貴い黃金にも、金屬で作つた武器にも、貨幣の意味ともなるのが、この例です。

假借（しゃ）　これは物の音とか、鳥獸の聲をうつすやうな場合に、用ひられるもので、其の文字の本來の意味とは關係なく、たゞその音が意味を有するのです。木をきる音に「丁々」（ちょう〳〵）、車が「轔々」（りん〳〵）などいふのは、この例です。

の六つがそれなのです。

かういふ文字を見ると、それによつて、昔の支那の社會の有樣などを、考へる上のいゝ參考になりますから、もう少し說明しておきませう。繪文字の象形には、山は、日は、月は、目は（目はこれがたてになつたのです）馬は、魚は、車は、など、其のものゝ形をとつたものもあります。また其の形で第一に目につく所をとつて、例へば牛を、羊を（この二つは角を主として顏をとつたのでせう）子を（子供の頭の大きいところを、つかまへて作つたもの）の如きもあります。女は、で、人が跪（ひざまづ）いて居る形にしてあります。これは女は男に從ふべきものといふことを、意味してゐるので、大昔の支那では、男女同權（だんじょどうけん）などといふことは、考へられても居なかつたのです。それから母（この字は指事です）は、で、女に・・卽ち乳房を、はつきりつけて、おかあさんといふことをあらはして居ます。會意で一つの例をとりますと、男は、で、田（田地）と（これは農具の形ですが、それで力（ちから）とか勞働（らうどう）とかの意味をもつ力といふ字になるのです）の組み合はせです。男は田に出て勞働（らうどう）するものとされて居たことが分ります。父は、で、（手）に棒（）は指揮（しき）とか支配（しはい）とかの意味（いみ）を示して居ます）を持つて、家を支配することを示して居ます。

それから皆さんのよく御存知の字の一つをいひますと、貝があります。昔、支那で貝（子（こ）安（やす）貝（がひ）、寶貝（たからがひ））を貨幣（くわへい）としたことは、實物が殘つて居るので明ですが（挿畫を御覽なさい）、貝の字は此の子安貝でつくつた貨幣の形に象（かたど）られ、、などいろ〳〵あります。それで貝といふ部分を含む文字は、財產に關係のあるものとなります。次にいふのは

主として形聲の字ですが、財、資、貸、賃みんなそれです。貝はおかねですから、貝を分けると貧になるのです。なほ貝は禮物としても使用されました。賞賜、寶などはこの例です。漢字をかういふやうにして、御覽になると、なか〳〵面白いことがあります。」

大洪水

黄帝の後に出て、やはり五帝の中に數へられる堯と舜とは、後世の支那人が仰いで聖人とし、人君の模範とたゝへて居る天子です。一口に堯舜の世といへば、理想的な太平な世を意味することゝもなり、それだけ何事も理想的な飾りつけがされて居ります。いひつたへでは、自らはまことに儉約で、たゞ〳〵人民の安樂な生活を心がけられた。太陽や水といふものゝお蔭は、誰も蒙らないものはないが、それは餘りに大きいので、みんなが見のがしがちであるやうに、此の天子のありがたい政で、天下太平になり、萬民は平和な暮しをすることが出來たが、それを天子の功德だとは感じなかつたほど、大きい惠を民にかけたといふことです。それで堯の時の百姓などはひもじい思をすることもなく、

日が出りや働き　暮れゝばねむる
井ほりや水湧き　田を耕きやみのる
天子のお蔭が何あらう

と節おもしろく地面をたゝいて、うたふことも出來ました。

この御代に、親孝行で名高かつた舜といふ人が居ることを、堯が

聞かれて、さういふ人に政を委かせたら、なほよく治るだらうと、之れを召して大臣にしました。舜は百姓の子でしたが、堯をたすけてよく政をとり、遂に堯から天子の位をゆづられました。かういふ風にいゝ政が出來れば、百姓の子でも天子になれるといふことは、支那の國が、日本などとは違つて居る一つの大切なところです。

さて舜は地方の政治に注意しますし、また漢民族に抵抗する苗族なども征伐しました。殊にこの時には、音樂が盛になつたといふことですが、舜の作つたといふ歌なども傳へられ、その一つは今の中華民國の國歌にもなつて居ります。

此の堯舜の御代を通じて、一つの難儀は、黃河その他の河が、大洪水を起して居たことです。堯は初め鯀といふ人に命じて之れを治めさせましたが、うまく行かない。そこで鯀の子の禹にやらせました(後に鯀は刑罰を受けました)。禹は八年間も我が身を忘れて、この天下を苦めて居る大水を治めることに努力し、その間は我が家の前をすぎても、立ちよらうともせず、その職務第一につとめたといはれて居ます。さま〳〵の苦心で、つひにさしもの洪水をすつかり治め、民の患を救ふことが出來ました。舜はかういふ禹の功勞を見て、堯と同じやうに、我が子のあつたにもかゝはらず、禹に天子の位をゆづりました。それでこの罪人の子ともいふべき禹は、天子となつたのです。萬民をそのひどい苦から救ひ、その生活を安樂にしてやつたから、人民の感謝を受けることゝなつたのは當然で、人望の最も多い人は、天の心にかなふ人であるから、天子

となれたのです。

かく平和に王位をゆづることを禪讓といひます。これは後にいふ殷の湯王が夏の桀王を伐ち一七頁参照周の武王が殷の紂王を滅した事件――それを放伐といひます――と共に、古傳に見える王位更迭の二つの形式です。そうして支那ではかういふ形式の何れかゞ、後世の王朝のうつりかはりにも、現はれたのであります。

二　天命の動き

――夏殷の時代――

酒の罪

天子の位をゆづられた禹は、王を稱し國の名を夏とつけました。これは支那で、國の名をつけた始だといはれて居ます。禹は後に質素儉約の神樣のやうにあがめられますが、その政治の上にも、日日の行の上にも、常に勤儉力行の主義を實現して居ました。此のとき、始めて大變にいゝ酒を造つた人があつて、禹王に献上しました。王は之れを飲んで見て、「之れは甘い」とほめは致しましたが、「い

まにこれで國を亡す者が出て來るだらう」といつて、其の發明をした人を斥けたといふ話も、傳へられて居ます。

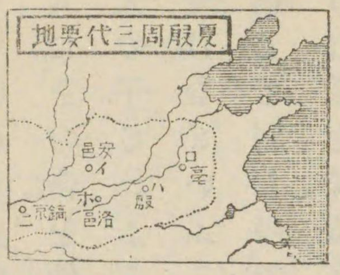
禹王もまた前のやうに、天下で最も人望ある賢臣を選んで、その位をゆづらうとしましたが、人民は、王の子の啓こそ、私どものほんとうの王様ですといつて、きゝませんので、つひに啓が王位をうけました。さうして子孫が相ついで王となり、四百年ばかりつゞきました。かういふえらい王の子孫にも、永い年月の間には、いろいろな人が出ましたが、最後の桀王になつて、一騒動が起りました。桀王は大變ぜいたくな人で、人民からの税を重くして、立派な御殿をつくつたり、日夜宴會にふける。肉で山を作つたり、酒の池をほつて、それに船を浮べるとか、あひづをして三千人もの家來をして、牛みたいに、それをガブ〳〵飲ませて喜ぶといふやうな馬鹿なことをして遊びました。これでは政がよく治るはずはありません。

支那では古くから王様の他に、多くの大名があつて、それ〴〵土地をもち、そこの人民を支配して居ました。王様はさういふ諸大名の總支配者ともいふべきものでしたが、この桀のやうな王では、そのしめくゝりは出來ません。ところがその大名の中で、一番人望のあつた湯王といふのが、桀王の如き亂暴者は天子ではない、そんな者は攻め殺しても差支へないといつて、兵を出して之れと戰ひ、その位を奪つてしまひました。禹王が心配した酒の害は、彼の子孫にまづあらはれたのでした。

この湯王が立てた國は商(後に殷)と申します。

象牙の箸

殷の國は六百年もつゞいたといはれます。初め湯王はいゝ政をして、桀に苦められた人民の難儀を救ひましたが、やはりその子孫には亂暴者も出ました。最後の紂王といふのは、前の桀王と並んで、暴君のお手本となつて居ます。この王は腕力もあり智惠もありまして、決して低能ではなかつたのですが、ぜいたくが好きで人民を苦めたのです。その時の賢人で箕子といふ人は、王が象牙の箸を作つたのを見て、この調子ではその奢は極まる所なく、國を滅すことゝなるだらうと嘆きました。が不幸にしてその通りに、紂王はだん〳〵わるい事をやり出しました。妲妃といふ美人を愛して、その言葉は何でもきゝ、稅は重くする、宮殿は美しく飾り立てる、晝も夜として大宴會を催すといふ有樣。また罪人には酷い刑罰を行ひ、火焙りなどをして喜びました。それで人民の苦を、見かねた大名の一人の周の武王は、つひに武力を以て、之れを攻め滅して、王位を奪ひました。この事件は、西洋紀元前一一二二年（神武天皇御即位前四六二年。）のことゝいふことですから、支那の歷史がいかに古く、その文化のいかに古かつたかも、察することが出來ませう。



（イ）＝山西省夏縣＝夏の都
（ロ）＝河南省商邱縣＝殷の初めの都
（ハ）＝河南省偃師縣＝殷の後の都
（ニ）＝陝西省長安縣＝周の初めの都
（ホ）＝河南省洛陽縣＝周の後の都

かういふやうに、武力でもつて暴君を倒し、新しい國を建てるこ

とを革命といふのです。革命は天命を革めるといふ意味です。支那人の考へでは、天下を治めるのは天であるが、然し天は手も口もないから、天のやうな心――情ぶかくて公平である――をもつ人に、その命を傳へて、代理をさせる。天子といふのは文字の通り天の子といふことです。さうしてこの天の子として、その命令を受けるといふことは、人望の最もあつくなつたことで、知られると信じて居たのです。だからいつでも、一番よく天の心にかなふやうな政をする人は、たとひ罪人の子であつても天子になれる。たとひ親から其の位をゆづられても、人民をいぢめ亂暴をして、天の心にそむくやうなものは、もはや天子のねうちがないものとして、この桀や紂のやうに、攻め滅されても仕方がなく、又そんな者は殺してもいゝといふのが、漢民族の考へ方なのです。それで支那では武力のすぐれたものが、天命を看板にして、皇帝の位をねらふことが絶えなかつたのであります。

三　聖人と大盗

——周の時代——

上手な釣人

殷を滅した武王は、都を鎬京（陝西省長安縣）にさだめました。この周の國は、武王の父の文王の時に、勢力が出來たのですが、それは太公望といふ賢臣の輔によるところ大でありました。文王が或る日の獵に、卜をしたところ、今日の獲物は「龍でなく熊でもなく虎でもなく羆でもない。獲る所は覇王の輔」と出た。此の時分の天子や大名は、獵その他のことをするとき、よく卜でもつて、その吉凶をうかゞ

つたものです。（さういふことに使つた龜の甲や獸の骨は、今なほ殷のときの實物が殘されて居ます）。さて文王は獵に出たところ、渭水といふ川の岸で、一人の老人が釣をして居るのを見つけました。話をして見ると、大へんえらい人物であることがわかつたので、「貴公こそかねて私の先君がさがし求められて居た方である」といつて太公望と名づけ、之れを大臣にしました。太公望は呂尙といふのがその本名で、山東省から流れ〳〵て、この周の領内へ來て釣をして居たのですが、一向につれない。「おぢいさん、毎日〳〵何を釣るつもりです」と聞くものがあれば、「おれは魚なんぞは釣らないよ」とばかり、相手にもしませんでしたが、こゝに太公望もまた望の獲物を得て、文王に仕へたのです。

（釣をする人のことを太公望といふのはこの事から起つたのです。）

武王も始めは、この大臣によつて政をなし、殷に代ることを得たのでした。二代目の成王は、まだ子供であつたから、叔父の周公旦といふ人が、攝政となつて善政をしました。この周公旦は、食事の間もゆつくりせず、賢人のたづねて來るのをはづさぬやうにと、心がけたといはれて居ます。それで周の初は、後世からは模範となる、いろ〳〵の制度が作られました。中にも井田法といふものは、土地の私有を許さず、政府が人民に平等に地を貸し與へて、その收穫を得させ、生活の心配のないやうにするしくみのものでありましたが、後にもこれにまねたやり方が、いろ〳〵起りました。この成王から次の康王にかけては、周の全盛時代で、天下太平、わるい事をする者もないので、刑罰はあつても、之れを行ふことがなかつたといふことです。

けれども、盛衰は何事にも免れ得ません。さしも太平をよろこんだ周も、十代目の幽王になつて、大いに變化を見ることゝなりました。周が國を建てた頃には、北方からも西方からも、野蠻人の侵入がありましたが、之れをよくおさへつけて居ました。さうして又かういふものに備へるための、いろ〳〵の設備もありました。幽王はその愛して居た妃の一人が、一向笑顔を見せてくれないので、どうかして之れを笑はせたいと思つて、一策を案じたのが、野蠻人侵入の警報でした。外民族が侵入して來たときは、烽火をあげてあひづをすることになつて居たので、早速それをやらせました。諸大名は國の一大事と、取るものもとりあへず都へはせ上つた。

都は何處を風が吹くかといふ靜さ。勢こんだ面々は、鳶に油揚をさらはれたよりも、もつと間の抜けた樣子をしたことでせう。これを高殿から見て、その妃は始めて笑つたので、王樣はよろこんだ。がをさまらないのは、諸大名の胸中でした。こんな馬鹿げたことをした國王でしたから、間もなく北方から侵入して來た犬戎といふ野蠻人に、攻め殺されてしまひました。それで次の平王は、今までの都を保つことも出來ず、危險であるからといふので、東の洛邑（河南省洛陽縣。後世の洛陽と同地。）に、都を遷しました。これは西洋紀元前七七〇年（神武天皇御即位前一一〇年）のことです。

覇者の爭ひ

支那の歷史では、此の平王が東へ都を遷してから後、ざつと三百年ばかりの間を、春秋の世といひます。此の間の事はだいたい、聖人として誰も知らない者はないあの孔子が、書かれた「春秋」といふ歷史の本にあるので、かういふ名がついて居るのです。

此の時代は北からは野蠻人が攻めて來る。周の天子は全く勢力がなくなつて、漢民族を救ふことが出來ない。そこで有力な大名達が、一方には周の王樣を尊んで、諸大名に忠實を誓はせ、外は此の侵入者を擊ち退けるために、立つことゝなりました。かういふ强い大名を覇者といひます。

その最初に立つたのが、今の山東半島地方を支配した齊の國の桓公で、管仲といふ賢臣の輔を得て、覇業を遂げました。この管仲

は、小さい時ひどい貧乏でしたが、同じ貧乏友達の鮑叔牙と、仲よく商賣などをしてゐました。後にその叔牙にすゝめられて、桓公の臣となり、つひには大臣になつたのですが、その貧しいときの友人の交りを、いつまでもかへなかつたといふので、美談として傳へられて居ます。（この「管鮑の交」のことを、後に唐の杜甫といふ詩人が、「貧交行」といふ詩に讃美しました。）

また覇者にならうとした人の中に、宋の國（河南省の南部）の襄公がある。南方の楚の國と泓水といふ川のほとりで戰つたとき、敵が川を渡つて進んで來たのを、家來が、いま攻めれば勝ちますといつたが、「いや君子の戰は堂々とやる、敵が困つて居るところにつけこむ法はない」といつて、敵兵の川を渡るまでまつて、さあ「討て」と命令を下しましたが、時はすでに遲く、大敗北をしてしまつたといふ話を殘して居ます。これから「宋襄の仁」といつて、情をかけないでもいゝものに情をかけて、却つて馬鹿を見ることをいふ言葉が出來ました。

この他晉（晉は山西省に都がありました）の文公、秦（秦は陝西省に都がありました）の穆公、楚（楚は湖北省に都がありました）の莊王といふ人も現はれましたし、西の方には秦の穆公、楚の莊王といふ人も現はれましたし、東南には吳（江蘇省方面）と越（浙江省方面）とがありました。吳越は久しい間、たがひに戰つて居ましたが、越にまけた吳王の夫差は、父の仇國の敵と、夜は薪の上にねて、その恨を忘れぬといふ勢で、つひに越を攻めて、その王勾踐を會稽山に降參させた。吳は勝つて心ゆるみ、越は復讐を謀り、ついで越が勝つて、會稽の恥をそゝいだといふ物語もあります。

こんな工合に戰爭が、あつちにもこつちにも、繰返されて居ましたが、いかに國をひろめた大名にしても、戰爭は決して幸福なこと

ばかりを伴ひません。從つてそんなことはやめて、お互が平和にしやうではないかといふ平和會議――その當時の語では弭兵會――が、開かれたこともありましたが、一方には慾心が出て來て、すぐ戰爭になつてしまひました。こんな工合で、弱い者は強い者に、その國を削られ滅されて來ましたが、またその強い大名の家では、家老に權力がうつり、晉の國の如きは滅されて、三人の家老が、その領土を分割して韓、魏、趙の三國を建てました。この三つの新しい國が、周の王から改めて大名たる許を得たときを、春秋の終り、次の戰國時代の始めと致します。さうして弱肉强食の傾向が、一層露骨になつて來た時代が始まるのです。

聖人の出現

かういふ力の世の中に、一方には道を說いて、天下を平和に治めさせやうとする聖人が、現はれて來ました。それは孔子です。孔子は今から二千四百年も昔に、魯の國（今の山東省にありました）の曲阜といふ所で生れました。小さい時から他の子供とは違つて、すぐれた德をもつて居ました。大きくなつては、支那の青年のすべての志すやうに、役人となりました。それはほんの小役人ではありましたが、よく其の職をつくして、人々から心服されたといふことです。然し孔子は世の亂れをどうにかして治め、人民をその苦から救つてやり度いといふ、ほんとうの政治家の尊い心をもつて居ましたから、

其の理想とする堯舜や周公旦のやつた、道德を基とする政治を實行し、周の天子を昔のやうな尊嚴のものにし、禮儀にかなふ世の中にしやうと努力しました。それで方々の國々に出かけて行つて、大名や大臣にそれを說きましたが、何分にも腕づくの世ですから、孔子のいふやうな道德で、國を治めるなどといふことには應じてくれる人はありません。そこで故鄉に歸つて、前からつき從つて來た弟子等に、道を說き學を敎へて、七十四でその一生を終つたのです。この學問が儒學となるのです。

孔子といへば、きうくつな修身の先生と考へ、その言行を記した論語といふ本は、あくびの出るお談議のやうに思ふ人が多いさうですが、それは大まちがひです。孔子は一人一人がその心を修めて行く心もちを以て、家をも國をも天下をも治めようといふ政治を說いた人です。そのいふことは決して二十世紀の今日の青少年の心に、あてはまらないやうなものではありません。澤山の眞理をいつて居る聖人の言葉は、決して死ぬものではないからです。皆さんは「論語よみの論語しらず」といふ諺を御存知でせう。私は「論語よみの論語しらずはうらやまし、論語よまずの論語しらずは」といふ歌のあることを申して、皆さんに論語もお讀みなさいと、おすゝめ致します。

この孔子の生れたよりも少し先に、やはりえらい學者で、老子いふ人が出ました。ある云ひ傳へでは、この人はおかあさんのお腹の中に、何十年も居たから、生れた時には、もうおぢいさんであつ

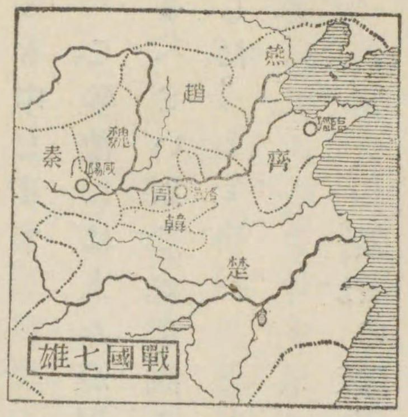
たので、老子といふんだなどども申します。此の人もやはり天下の大亂を治めることについて、また人々の修養のことについて、貴い言葉をのこしました。然しそれは孔子が道德的な、いろ〳〵な箇條でもつて、世を治めて行かうとするのとは反對に、何にもかれこれいはず、自然に任せておけば、天下が治るものだと主張しました。早い話が、凸坊と茶目とが喧嘩をしてゐるとすれば、「や、あぶない」の「喧嘩はわるいことだ」のといつたつて、なか〳〵やめはしない。はうつておけば自然にやめて、却て仲がよくなることもあります。そこの心持ちを大いに說いたのです。老子のいつた言葉は、大へんに、意味も深く、むづかしいものですが、その一例を手つとり早くいへば、こんな風なのです。この老子は生れたことに、不思議な話があるやうに、死んだことも一の神秘で、支那の歷史では西の方に去つて、終る所を知らずといつてあります。それで仙人になつたともいひ、ひどいのはインドに入つて、お釋迦樣になつたのだなどども申します。

この他には、人々が相愛して、戰爭などを、此の世からなくしてしまへといふことを說き、非戰論を主張した墨子といふ人もありました。

强者の天下

前にいつたやうに、小さい弱いものは敗けて國をとられ、春秋の終には、强大な國が七つとなり、所謂戰國の七雄が、相對抗すること

となつたのです。その七雄とは秦、趙、魏、韓、燕、齊、楚です。周の天子は、上に立つことにはなつて居りましたが、もう飾り物だけのねうちもなく、天下はこの七國の腕力次第で、風も起れば雨ともなつたのです。それでこの時代はその名の如く、戰爭が烈しく戰はれました。七雄といふのも、つまりは天下をねらふ大盜なのです。



中でも秦は一番つよく、他の六國は一國だけでは、とてもこれに勝てません。それで六國の同盟――合從といひました――を計畫して、秦をやつゝけやうとする人が、出て來ました。これは蘇秦といふもので、巧みな辯舌で、だん〳〵六國を說き伏せて同盟させ、自らはその大宰相となつて威を振ひました。然し六國同士はお互に利害關係があるから、仲間われのしやすいのは當然ですし、また秦はその同盟の邪魔をして、自國の安全を謀りました。それに同盟軍は秦を攻めて、函谷關で大敗し、韓と趙とは秦に攻められて、八萬人からも殺されたこともありましたので、同盟は永續きが出來ませんでした。之れを見て張儀といふ者は、六國に、秦の强いこと、秦にはとうてい勝ちにくいから、之れと平和に、結びつくことの利を說いて、連衡の策に成功しました。初めこの張儀は辯論の術を學んだが、志を得ないで、ぐづ〳〵して居たある日のこと、細君と喧嘩をした。すると張儀は、いきなり口をあけて見せて「オイ、おれの舌はまだあるか」ときいた。細君は妙な顏を

して「何ですね、舌がなければ、口がきけないぢやありませんか」といふ「よし。この三寸の舌があれば……」といつて、家をとび出したが、こう〳〵この大業をしとげたといふことです。

合從が破れ、連衡は出來ましたが、秦は六國を滅すことを目的にして居ます。六國とても、各、强者を以て任じてゐるものですから、秦に屈服するやうな有樣には、永く我慢することは出來ません。それでこの連衡も、やがてこはれて、我利我利の諸國は戰によつて、その領土をふやし、その野心を滿足させやうとしたのです。

戰爭は大小いく十、いく百もあつたでせうが、中にも燕と齊との戰では、初め燕が勝つて、齊の城はたゞ僅に二つだけが殘つて、あとはみんな燕に占領された。それを田單といふ齊の大將が、火牛の計といつて、牛の尾にたいまつをつけ、角には刀を縛りつけて、敵陣にあばれこませて之れをなやまし、忽ちにして、とられた七十餘城を復したといふすばらしい話もあります(この牛は青島牛の先祖ですよ)。また秦が趙を討つて、長平といふ所で戰つたときには、秦は降參した趙の將士四十萬人を、生埋にしたといふ酷い物語りも、傳へられて居ます。

そのうちに、秦は周を滅し、その王に政といふのが出て來ると、諸將軍の力によつて、こう〳〵六國を滅して、西洋紀元前二二一年(我が國では第七代孝靈天皇の御代。)に天下を統一しました。こゝで支那には、始めての統一的大國家が現はれることゝなつたのです。この政といふ秦の王こそ、萬里の長城で有名な、始皇帝なのであります。

食客と學者

前の春秋時代にしても、この戰國時代にしても、力づくの世の中でありましたから、天下に事をしやうとする人は、それ〴〵の才能に應じて、立身出世をしやうとつとめました。殊に戰國には、それが一層はげしくなりましたし、また一方には野心ある大名が、一藝一能のある者は、何かの用に立てやうと、之れを歡迎して、客分として優待しました。そこでかういふ食客は、どこの國にも養はれました中にも、齊の孟嘗君は食客常に數千人、楚の春申君は三千餘人、趙の平原君は數千人、魏の信陵君もまた三千人といふやうな、レコードが殘されて居ます。しかもこの食客――居候は、「三杯目にはそつと出し」などといふのではなく、威張つたものでありました。出づるに車なし食ふに魚なし」と駄々をこねたものもあります。それでその生活も、なか〳〵ぜいたくなのがありました。趙の平原君が楚の春申君の所へ使を出すとき、富强を示さうといふので、髮には玳瑁の簪をさゝせ、腰には珠玉で飾つた刀を佩かせてやりました。ところが楚の數千の食客の中で、一番いゝ待遇を受けて居たものは、寶玉をちりばめた履をはいて居たといふことです。この食客は、然したゞぶら〳〵して居たゞけではなく、それ〴〵その主君のために、いろ〳〵の役目をしたのです。

それからまた當時は、賴まれゝばいやといはずに、人殺しも引受ける一種の男俠も居ました。さういふものゝ活動の中で、最も劇

的の場面を歴史に殘して居るのが、燕の太子に賴まれて、秦王の政を刺さうとした荆軻です。

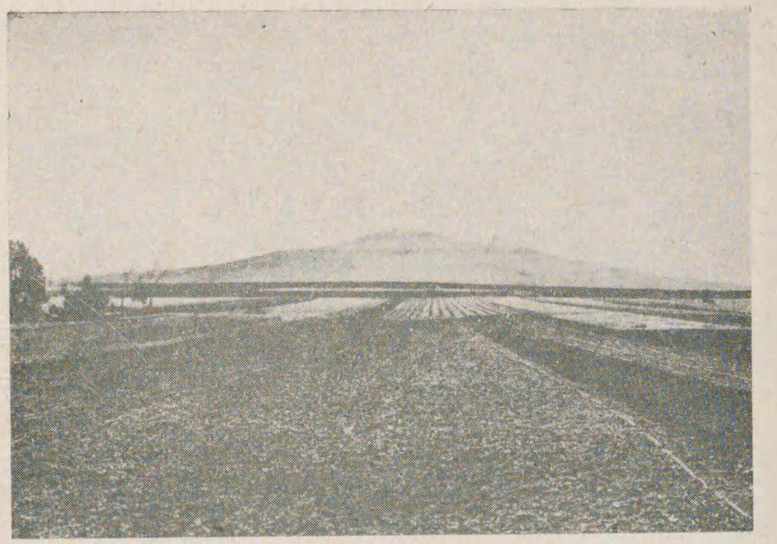
なほまた血なまぐさい風の吹きまくる世ではあつたが、その亂れの間にも、學者が澤山に出て、いろ〳〵世を救ふ道を說きました。道德政治で天下を太平にしやうとつとめたのは、孔子についで賢人とあがめられる孟子であります。それから老子のやうに放任主義をとつて、それよりもはげしいことをいつたのは莊子でした。戰爭の盛な時ですから、戰術兵法を說いた人もあります。又こんな世の中は、とても道德などで治まるものでない、人間といふものは、もと〳〵性質が惡いものだから、それを導き治めるには、刑罰の他に方法はないと、法律萬能を主張する學者もありました。商鞅や韓非は、此の派の學者でしたが、商鞅は戰國の初め、秦で實際の政治をとつて、治蹟をあげました。秦は代々この方針によつて、國を富ましし兵を强くし、終には天下の統一を遂げることゝなつたのであります。

中世の話

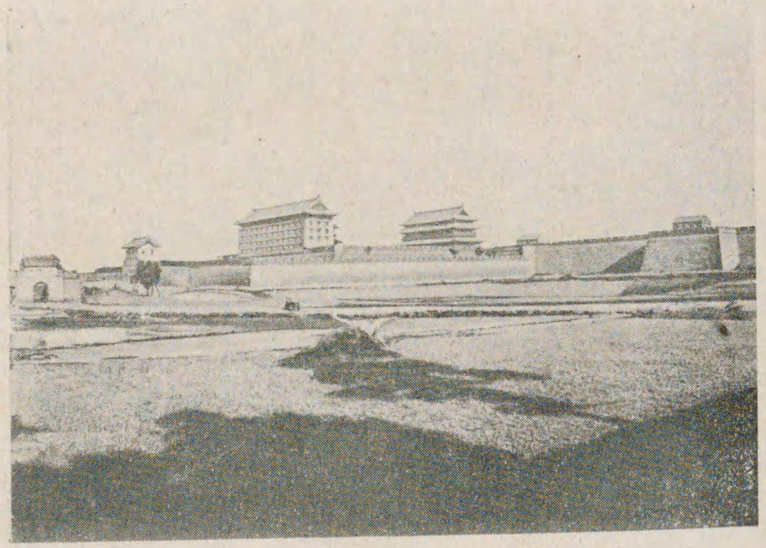
この時代は秦の統一から唐の末までで(日本でいへば、第六代の孝靈天皇から醍醐天皇までの千百年餘)、漢民族が北方民族と戰つて、遂に勝利を得、唐ではその極盛時期を現出しました。東西兩洋の交通も開けたときでもあります。唐になつては、わが日本との關係も大變に密接になります。

城壁の近附黄達八（15）

(15) 北京の北、八達嶺附近の長城の大觀です。萬里の長城といつても、秦の始皇帝のは、ずつと北の蒙古の北側に沿うて造られたもので、これとは違ひます。然しそれはすでにとうの昔にくづれて、今は其のあとを求めることもむづかしいさうです。この長城は主として明のとき蒙古人を防ぐために、修築されたもので、城壁は高さは二丈位、幅は上部でも一丈二、三尺はあります。圖に見られるやうに、山の峯をうね〳〵と走つて、道は圖の右下に近いアーチの所を南北に通じて、いかにも「一夫關に當れば萬夫も開くなし」といふやうな感じを與へます。



(16) 秦の始皇帝の陵

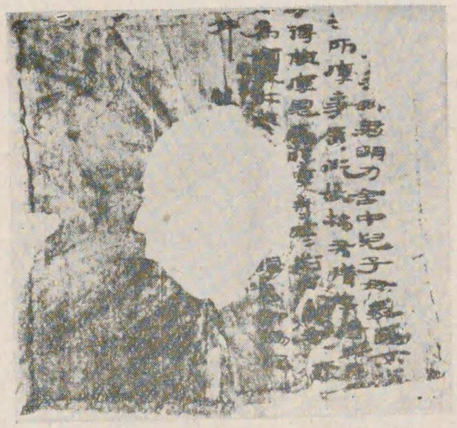


(17) 長安の現景

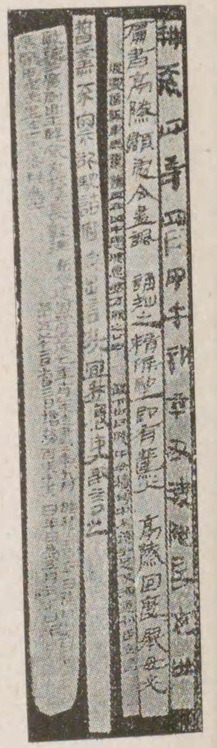
(16) 秦の始皇帝の陵は、陝西省臨潼縣にあります。圖の小山のやうに見えるのがそれです。生前非常に豪奢なことをしたといひましたが、この墓の如きは、その中に山海の景色をしくみ、多くの寶物を遺骸と共に葬つたといふことです。それで項羽はこれを發いてその財寶を盜んだのです。

(17) 長安は周の鎬京と同じ地。前漢、隋、唐などの首府となつて榮えた地で、支那の文化史の上のいろ〳〵な遺物があります。この圖は現在の長安の北門を示したものです。支那の都會は大小粗密の違はありますが、その町全體を城壁でとり圍んであつて諸所に樓門があるのです。だから一口に城といつても、日本の昔の城のやうに、大名の居る御殿の意味とは大變な違ひです。

狀現の漢沙ンカマラクタ　(18)

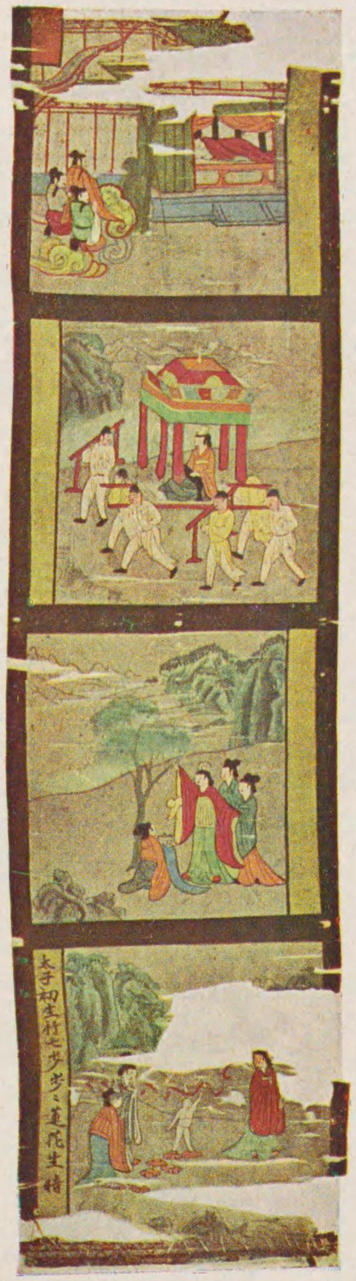


(左)帛と(右)簡木の代漢　(19)



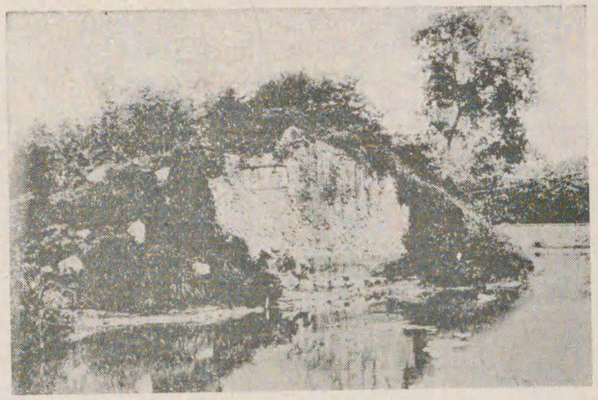
(18)　これは支那の西の新彊省の中央にあるタクラマカン沙漠の景です。駱駝が大切な交通機關です。この沙漠のまはりには漢時代以來、多くの國家があつたのでさういふ國々の遺跡は、ヨーロッパの支那研究者によつて、いろ〳〵と探檢されて居ます。

(19)　これは漢時代の木簡と帛ですが、これは今いつたやうなヨーロッパの學者によつて、この地方で發掘されたものです。紙の發明以前それに代へられたものであることは、本文で一言しました。かういふ發掘品は、他のものと共にロンドン、パリ、ベルリンその他に、澤山にもち行かれて居ります。

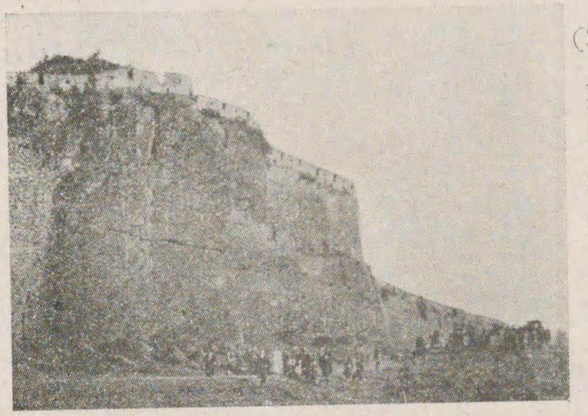


(20)　釋迦降誕の圖(唐時代の繪畫)

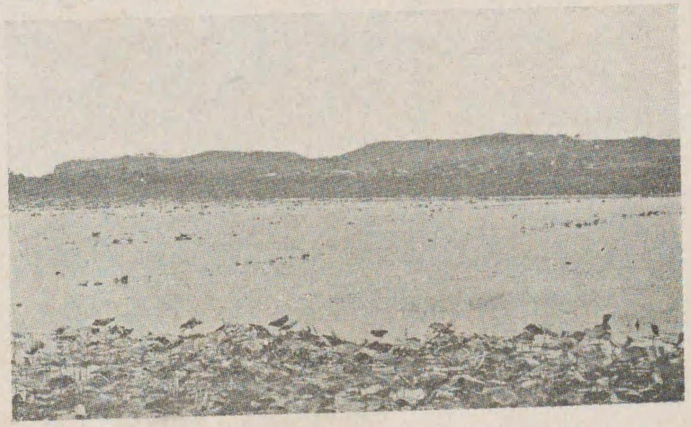
(20) これは甘肅省敦煌(とんくわう)の千佛洞でイギリスの學者に發見された唐時代の畫です。至極簡單なものですが、釋迦の降誕についての傳說を現はしたものです。日本の繪卷物をたてにしたやうな形式で、繪には一々詞書(ことばがき)をつけるやうになつて居ます。



(21) 赤壁の故址



(22) 石頭城(南京)(中)



(23) 莫愁湖(南京)(下)

(21) 湖北省嘉魚縣にある赤壁の故址です。後漢の末に曹操の軍を、孫權と劉備の聯合軍が、撃破した水戰のあつたところで、後に宋の蘇東坡が、こゝに船を浮べ、「赤壁の賦」を作つたので、また一層有名になりました。

(22) 南京の西部にあつて、初め吳の孫權の據つたところ、後に晉はこれを陷れて、吳を滅し、天下を統一したのです。

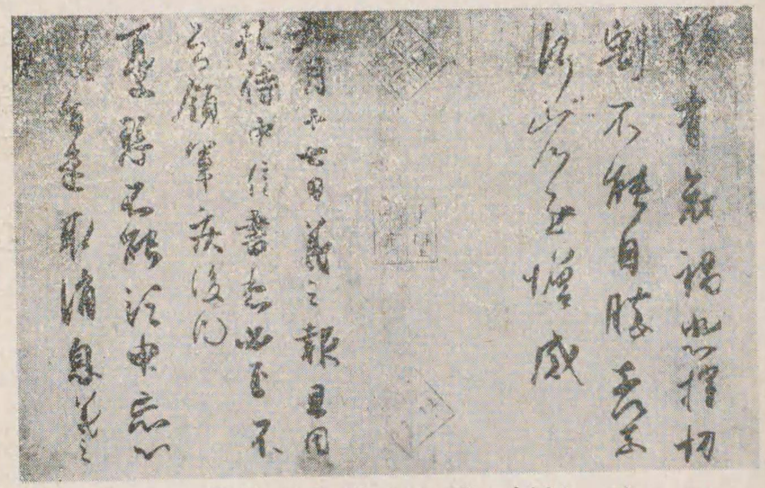
(23) これも南京にあります。この圖は、(22)、(24) と共に三國の吳以來、永く南方の都となつた今の南京（昔の建業、建康）の有樣を示さうとするために出したものです。莫愁といふのは、梁の武帝その他の詩人にうたはれた美人の名によつたものだと申します。

(24) 南京の鷄鳴寺

(25) 滿洲に於ける一道觀

(24) 南朝は佛教が盛であつたといふことは、本文で一言しました。唐の詩人は「南朝四百八十寺」などと、この南京の寺院の多かつたことを歌ひました。これはさういふ支那の南方の寺院の見本として、また南京の風景を示すものとして、こゝに入れました。この寺の始めは、南朝の宋の天子が建てられたといふことです。

(25) 道觀（だうくわん）といふのは道教の寺、立つてゐるのは道士（だうし）で、道教の僧ともいふべきものです。これは滿洲の千山の一道觀の景です。道教といふ宗教は、本文でもいつたやうに、支那民族の信仰の上にも道德の上にも、今日、最も强い力を張つて居るものです。支那民族は、この宗教によつて其の生活をして居るともいへる程に、支那の社會、支那の人心には、此の教が感化を及ぼして居ます。

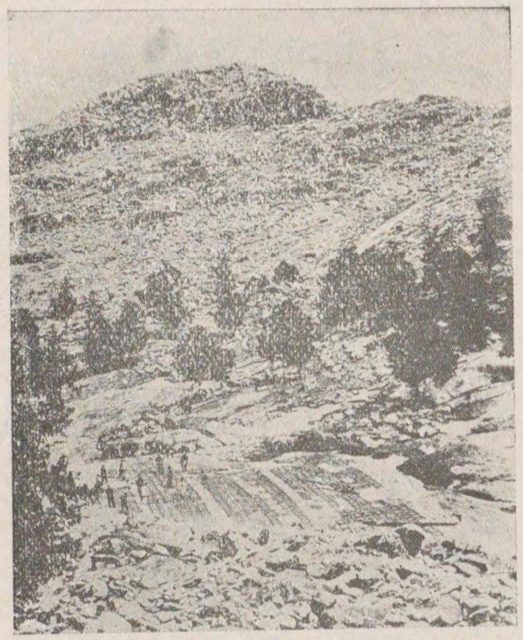


（26） 晋の王羲之の筆蹟

（27） 晋の顧愷之筆女史箴圖卷

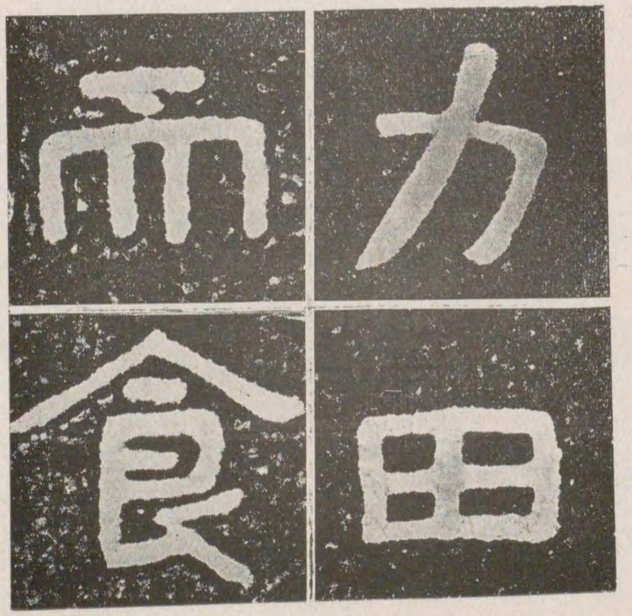
(26) 支那の書聖といはれる東晋の王羲之の筆蹟と傳へられるものです。が實は眞筆ではなく唐時代のうつしであるといふことです。それは双鈎といふやり方でやつたもので、もとの字の輪廓だけを引きうつしにして、その白い部分を塗り埋めたものなのです。かういふ方法は、唐の人々が最も上手であつたといふことです。

(27) 東晋の顧愷之の筆と傳へられる繪卷物で、もとは清の皇室の所藏でしたのが今はロンドンの大英博物館に入つて居ます。これもやはり眞筆ではなくて模寫だと專門家は申して居ります。この卷物を見ると當時の貴族の生活の有樣などが分ります。風俗を見る上に大變いゝ參考となります。



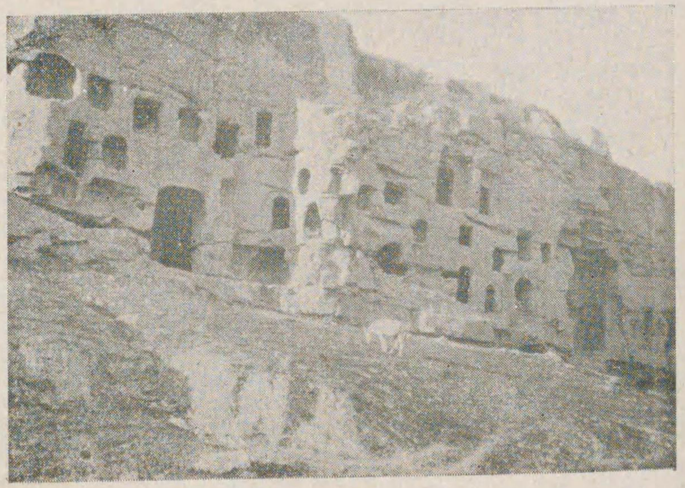
(28) 泰山經石谿(上)

(29) 同所刻字の拓本(下)



(28) 泰山にある磨崖碑（自然の岩石を碑石として字を彫つたもの）の一種で、字は谷間の河床みたいな石の面に彫られて居ます。黑い線みたいなのが其の一部分です。この金剛經の刻字は磨崖碑でも、最も大じかけなものです。(29) はその刻字です。かういふ大きな仕事をしたこの筆者は誰だか、はつきり分つて居ませんが、一說では北朝の齊の王子椿だともいひます。さうこすれば、千四百年近くも昔です。

(31) 同所一小窟の菩薩像（上）



(30) 山西省雲崗石佛寺石窟の一部（下）

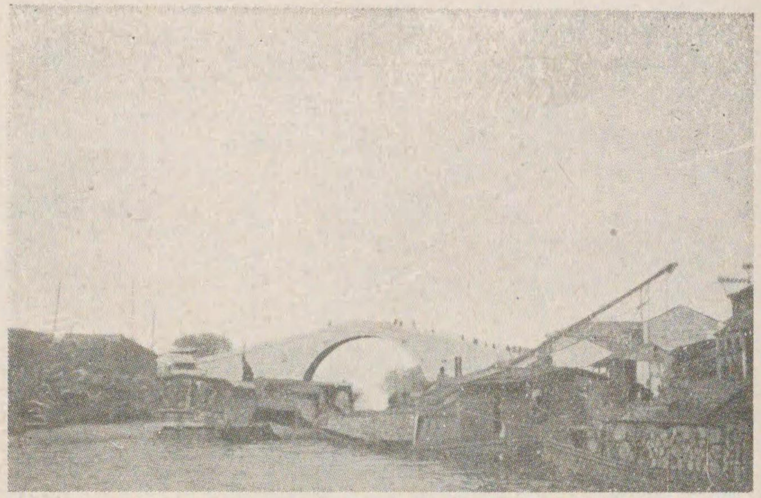
(30) 山西省雲崗の石窟は、本文で一言したやうに、北朝の魏の時に、皇帝（文成帝）の信仰心から開かれたもので、大小無數の洞窟か、自然の岩山の中腹につくられて、それにまた大小無數の佛像なぞが彫刻されて居ます。こゝの立派な彫刻を初めて世界に知らせたのは、工學博士伊東忠太氏です。この圖はその西の方の一部分を示したのです。

(31) 雲崗石窟の一小窟の菩薩像です。この像の口もとの微笑は何とやさしいものではありませんか。

(32) 雲崗石窟の大佛

(32)

雲崗の彫刻の中で、最も大きい石佛の一つ。高さは五丈餘。また最も古いもので、文成帝がその祖先の供養の爲めに、つくらせた五體の一つです。雄大な中にも前のと同じやうにやさしさが口もとに見られます。



河運大の代現（33）

上　　同（34）

(33)、(34)　これは現時の大運河で、支那の南北を通じる大切な交通運輸の道です。隋の運河が後にたびゞ〳〵改修されて、今日見るやうなものになつたのです。(33)は江蘇省内ので、この圖に見るやうな石橋は、中部支那の景色の一つの特色です。

(34)　は山東省を通じて居るものです。

偶土の唐（35）

(35) 唐時代には貴人などが死ぬと、その墓にはいろ〳〵の寶物や、こんな人形などを一しよに葬りました。(中には臺所の形や、牧場などの有樣を造つて入れることもありました)。かういふ人形で、其の時代の風俗などを幾分か、うかゞふことが出來ます。楊貴妃は肉づきのいゝ美人であつたといひますから、こんな風の人形から想像することも出來ませうか。

(36) 唐の吳道子筆釋迦像

(36)　唐の吳道子(道玄)の筆として傳へられる釋迦の畫です（京都の東福寺所藏)。此の時代には、寺や塔の內壁に、壁畫を描くことが大變流行しました。畫家の多くは皆これに從事しましたが、吳道子などは、その數の最も多い方です。皆さんも御存じの我が法隆寺の壁畫の如きは、唐のかういふ事の影響なのです。吳道子は玄宗から厚く信任を受け、勅命がなければ筆をとらなかつたとも傳へられて居ます。またこの天才によつて、山水畫も一新生面がひらかれました。尤も此の繪は專門家からは、吳道子の眞筆ではなく、後世のものといはれて居りますが、玆には其の名によつて傳へられて居るものですから、載せたのです。

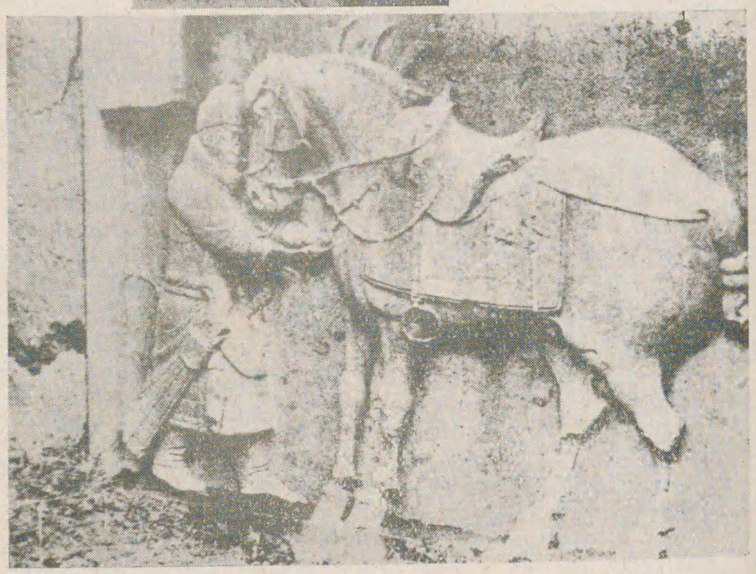
佛石の寺先奉門龍省南河　（37）

(37) 河南省の龍門は洛陽の近くにあります。こゝの石窟は北朝の魏の時代に開かれ、唐の時代まで其の製作がつゞけられました。それでこゝにはこの永い時期にわたる彫刻の傑作もありますが、またこれらの佛像を作つたいはれを記した銘(めい)が澤山あります。それらの銘の文字は、書道の方からは大變に貴いものとされて居ます。

この佛像は龍門の無數の彫刻の中で、最も巨大なものであり、また其の技巧(ぎかう)のすぐれて居る點でも、唐の美術の一大傑作といへるものです。

(38) 山西省天龍山石窟の唐代彫刻(上)

(39) 陝西省唐の太宗陵前の石馬(下)



(38) 山西省天龍山の石窟は、北朝の齊の時代に初めて作られ、唐の初めまでその製作がつゞきました。石窟は小さく、數も少いのですが、彫刻には、いゝ作品が殘されて居ます。この唐初の作の如きは、龍門にも見ることの出來ない優美なものです。この石窟は工學博士關野貞氏の探檢によつて、學界に知られることゝなつたのです。

(39) 陝西省の唐の太宗の陵（昭陵）の前にある石馬で、太宗生前の愛馬六頭中の第一のもの。太宗が愛馬に中つた矢を拔いてゐるところだといふ說もありますが、實は太宗ではないのです。馬の彫刻としては、最もうまい作の一つです。

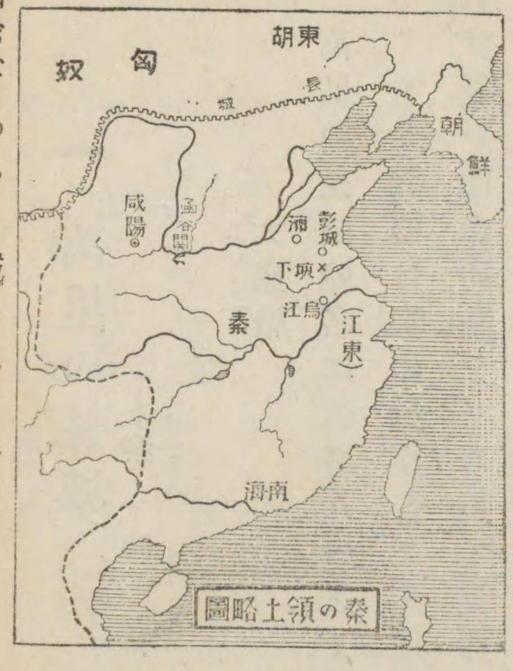
一　萬里の長城

——秦　時　代——

大皇帝

萬里の長城の名は皆さんのよく御承知のものでせう。これをつくらせたのは秦の始皇帝です。前に申したやうに、秦の國王の政は、長い間の紛亂をしづめて、支那の大統一者支配者となりますと、前にいつた三皇五帝のてがらや德を自分ひとりに兼ねた、王の王だといふ誇から、皇帝といふ尊稱をつかふことにしました。（これから天子のことを皇帝といふやうになつたのです。）また昔は王樣などが死ぬと、家來達が集つて、その王樣

の行などによつて、諡といふものをつける習慣がありましたが、家來のくせに、其の王樣をかれこれいふことは、不都合だといつて、此の秦の皇帝は諡をつけることをやめさせ、自ら第一世皇帝といふ意味で、始皇帝と稱しました。さうして子々孫々に傳へて二世三世、萬世の末までも、秦の國を榮えさせると意氣込んだのでした。



支那はこの秦になつて、四方に分れて勢力を爭つて居た國國が、すつかり滅されて、一まとまりになつたので、國々の分立をさせるやうな、今までの封建制度をやめて、すべてを皇帝が直接支配する、郡縣の制としました。支那はこれで、ほんとうに統一された大國家を、見ることゝなつたのです。それで天下にまた騷動の起らぬやうに、武器を取上げるとか、人民に皇帝の威嚴を示すため、美美しい行列をして、各地を巡行するとかする一方には、度量衡の制度を改めて、全國同一のものさし、ますやはかりを、用ひさせることをきめましたし、文字も以前の面倒な形から、簡單な小篆、隷書を作つて使はせることゝしました。

が更に人々の思想を統一して、秦の政府の方針である法律萬能主義に、服從させやうとしました。李斯といふ大臣の上奏を許して、道德政治などを主張することは、危險思想として取締ること、

し、その手始に人民のもつてゐる書物は、醫藥や卜の書や農業の本の他は、すべて政府に差出させ、之れを燒棄てゝしまひました。（これを焚書の事件といひます。）それからさういふ思想を宣傳する、都の儒學者を捕へて、四百六十人も生埋にしました。（これを坑儒の事件といひます。）これでやつと危險思想を禁止することが出來たと、皇帝もその大臣達も安心をしました。それで皇帝の强い權力の下には、みんな恐れて、うはべは從つたのでありました。

萬里の長城

漢民族がかうしてまとまりのついたとき、北の方には匈奴といふ蒙古の野蠻人が勢がつよくなつて來ました。これは牛馬騾駝などを飼つて、その家畜と一しょに、水や草のある所を動きまはつてる游牧民で、騎射が最も上手でした。戰國時代に秦や趙や燕に侵入して漢民族を苦めたので、趙や燕では國境に城壁を築いて之れを防いだこともありました。始皇帝は大統一を遂げた上は、さういふ漢民族の害をなすものを、ほうつておくのは、その體面に關することですから、三十萬といふ大軍を出して、之れを攻め破り、蒙古の一部分を取りました。そこで侵入を防ぐために、いはゆる萬里の長城を築いたのです。それは前記の戰國時代の城壁をも利用し、山をめぐり谷を越えて、支那の西のはて（甘肅省臨洮縣）から、東は遼東に達しました。（今あるものよりも、ずつと北にあつたのです。）

始皇帝はその强大な權力で、國內の統一もする、外民族をも征服

する。その宮殿の阿房宮の如きは、今まで見られなかつた大建築で、善をつくし美を極めたものであつて、後に詩人は、これが火災にかゝつたときの有様を形容して「火三月紅なり」ともいつて居る位です。したいと思ふこと、何一つ出來ないことのない此の大皇帝も、然しなほ安心の出來ないことがありました。それは「死」です。そのためいろ〳〵な迷信を信じて、どうかして死からのがれたいと願ひました。支那では昔から、仙人といふものが、東海の中の神山に住み、不老不死の藥を作ると信ぜられて居ました。その仙人の處に、その藥をとりに行くものは、方士といつて特別な修業をしたものでなければ駄目でした。始皇帝はかういふ方士に賴んでは、その藥を求め、永久の命を得たいと願つたのです。けれども方士たちは、皇帝から、澤山のお金をとつては逃げてしまひます。最後の巡幸のときの如きは、「死」といふ語をつかふことを禁じ、犯せば死刑にするとさへ申しましたが、それほどにほしかつた不死の藥は、とう〳〵手に入らずに、いやでいやでたまらなかつた死神の手は、却つて此の大皇帝を攫んでしまひました。それは西洋紀元前二一〇年のことです。

虞美人草

始皇帝の次にはその末子の胡亥といふのが立つて、二世皇帝となりました。この皇帝は父に似もやらぬ愚な性質で、天下を治める腕もなく、たゞ自分の快樂ばかり考へる人でした。皇帝は賢く

なく、政をまかされた大臣等は、勝手なことをして政をみだすこと、ふことになつたから、始皇帝のときには、その權力に恐れて、反抗したくも反抗の出來なかつた不平の民は、これを機會に方々で、むほんを始めました。その中でも項羽と劉邦とが最も有名です。

項羽は書物を習つたときには「字は姓名が書ければ十分だ」といつて、學問には骨を折らず、擊劍を教へられたときには「擊劍は一人を相手にするだけのことだ、おれは萬人を敵とする法を學ぶんだ」といつて、兵法をならつたといふことです。項羽と劉邦とは、めい〳〵方面を分けて、秦の兵と戰つて居たが、つひに劉邦がさきに秦の都に討ち入つて、秦を滅しました。秦は始皇帝が、萬世に傳へると威張つたが、たつた二世十五年で亡びてしまつたのです。（西紀前二〇六年。）

項羽はこれを聞いて、秦の都の咸陽へ急ぎました。道で劉邦を鴻門に招いて宴會を催し、その場で之れを殺さうとしましたが果さず、劉邦は甘く逃げました。咸陽に入つた項羽は、さん〴〵に都を荒らし、秦王は殺す、宮殿には火をつける、財寶は奪ふ、なほひどいことには始皇帝の陵も掘りかへし、そこに埋めてあつた寶物を盗むといふ亂暴をして東に引き上げました。

これからこの二人の天下爭ひとなりました。之を漢楚の爭といひます。それは項羽が自ら西楚の覇王、劉邦は漢王と稱したからです。項羽は年の若い元氣な大將、劉邦はもう五十を越した考深い將軍でした。二人の氣質は、始皇帝の天下巡幸の行列を見たときの感想でも、うかゞはれます——項羽はその盛な樣を見て、

「よしあいつに代つてやるぞ」と力んだのに、劉邦は「男と生れたら、あなり度いものだ」といつたといふことです。

二人の爭は、つひに項羽のまけとなりました。垓下といふ城で、漢の軍に圍まれたとき、もうその運命をさとり、詩をつくつて、その愛して居た虞姫といふ美人に別れをつげ、圍を破つて逃れましたが、烏江といふところで、つひに自殺してしまひました。名前だけ書ければ、いゝといつた人は、立派な詩人でもあつたのでした。またその虞姫の墓からは、あの美しい虞美人草が、萌え出でたといふ傳へもあります。

さてこの戰爭に勝つて、劉邦は天子の位につきました。これが漢の高祖といはれる人です。高祖は政治のやり方は、大體は秦をまねましたが、郡縣制度と封建制度とを交ぜた郡國の制度にし、大名に領土を與へもしたが、大切な場所は皇室の直領地としました。

大帝國としての秦は、僅に十五年で亡びましたが、其の名はいま私どもがよく使ふ支那といふ語のもとをなすことゝもなり、また英語のチヤイナ、ドイツ語のヒナなどのもとゝもなりました。この秦の支那音はチンで、これが後にインドに傳はつて、チナとかチニスタン（チンの土地）とか、なまりました。このインドの語が、ヨーロッパに入つて前記の語のもとゝなり、一方はインドに來た支那の僧侶によつて、その本國に傳へられることゝなつたのです。だから秦の名は、まだ滅びずに居るとも、いへるのです。

二　沙漠をこえて

——前漢の時代——

男まさりの皇后

漢の高祖は秦に代つて天下を取りましたが、それは彼の股くゞりで有名な韓信や、張良や蕭何などといふ、勇將や謀士の輔によることが多かつたので、かういふ人々を大そう厚く賞して、自分の一族と同樣に、大名にも致しました。高祖の皇后の呂氏は、帝がまだ身分のひくい時から、よく夫をたすけ、戰爭の間にも辛苦を共にした人でしたが、皇后になると、いろ〳〵政治の上でも、夫の片腕とも

なつてはたらきました。然しその性質が疑ひぶかくて、大名でもあとで漢の皇室の禍になりさうなものは、功臣であつたものでも何でも、之れを殺したり除いたりすることを、帝にすゝめました。

高祖の次の惠帝のときには、一層その勢力を振ひ、自分の一家のものを大臣などにしましたが、よる年波と病とにはかてず、權力に心ひかれながらも、つひに夫帝のあとを追ひました。あとで一族は不安となり、不安のあげくに亂を起しましたが、とう〳〵滅されてしまひました。

其の後、文帝景帝などが出て、民をいたはる政に意を用ひ、何事も質素に、宮中の婦人の衣服も長くひきずるやうなものは、許しませんでした。その上に豐年が打つゞいて、年貢の穀物もよく納り、穀

物は朝廷の倉にみち〳〵て腐るほどになつたと傳へられます。それで或は租稅を免除したり、刑罰を輕くしたりもしました。

景帝のときには、餘りに我が儘になつて來た大名達をこらし、帝室の力をつよくするため、大名の領土を削つたのがもとで、吳とか楚とかいふ國々以下、七國の亂が起りました。一時は大騷ぎでありましたが、つひに官軍の勝利となり、これらの諸國は全く大名たる實力を、奪はれることゝなりました。それで皇帝の權力は、非常につよくなり、その富はまた前にいつたやうに、增大して來ましたが、かういふ時に、景帝についで天子となつたのが、武帝といふえらい方でした。

土產の葡萄

武帝は文武いづれにもすぐれた才能をもつた上に、前申したやうに、權力も强く國庫も富むといふ好都合のときに、帝位につきましたから、これこそ鬼に鐵棒。何事でも出來る筈であつたし、また實際いろ〳〵な仕事をして、大皇帝たるえらさを示しました。

北では前に秦にやられた匈奴が、また勢を復して來て、漢の領分に侵入し、高祖は之れを討つたが負けて、擒にされたこともありました。それゆゑ匈奴は鼻つぱりが强く、漢は內親王（支那では「公主」といひます。）を、その酋長の妻にやつて、御機嫌をとるといふ有樣でした。こんなことは、武帝が我慢できるはずはありません。それで度々これを討

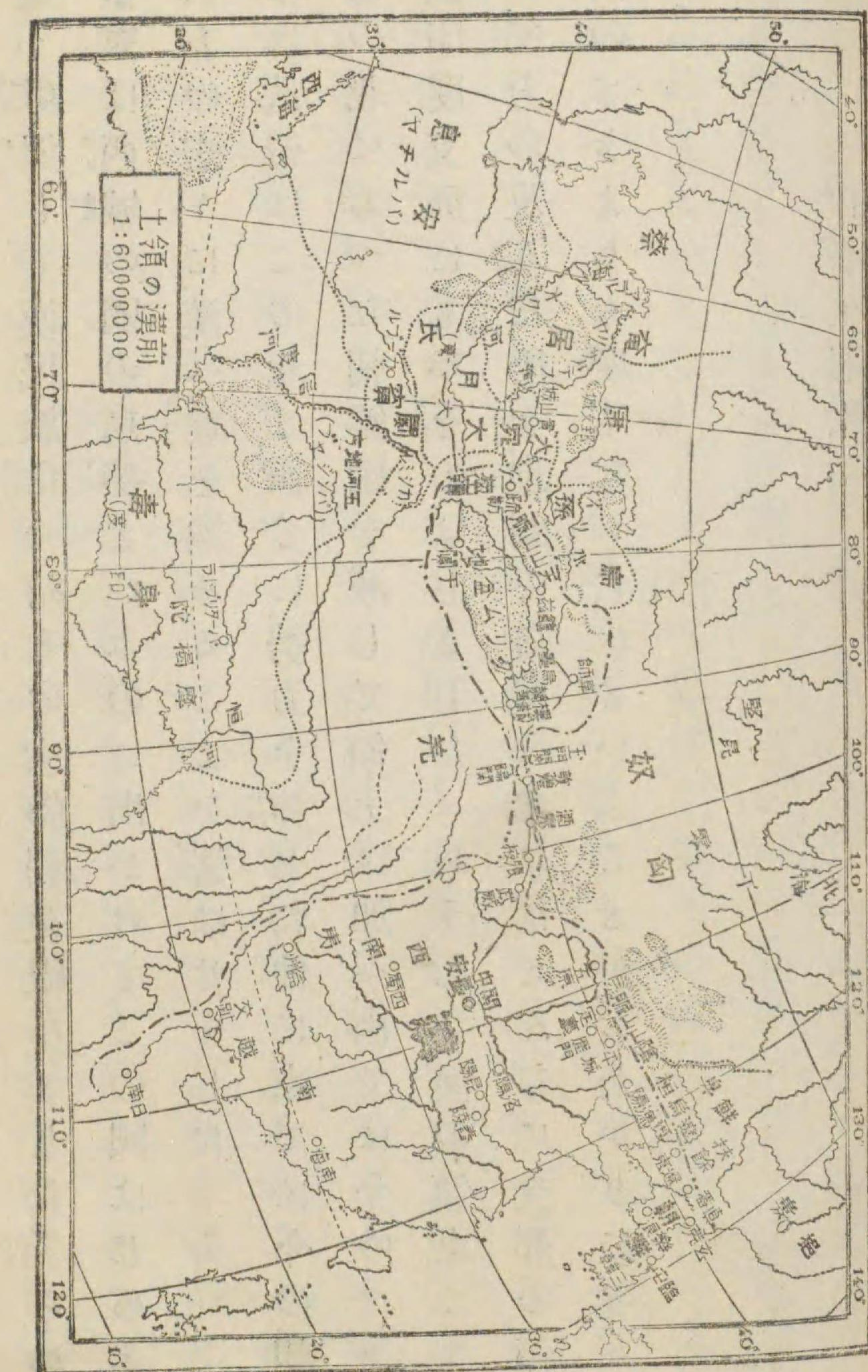
つためにに、兵を出しましたが、最後の勝利を得るには、西の方の國々と同盟するのが、得策だと考へました。それで前に匈奴にひどいめにあつて、西方へ逃げた大月氏といふ國に、使を出すことゝなりました。

今の地圖で、新疆省といふ支那の西の地方や、そのまた西の中央アジアなどを漢人は西域と總稱して居ました。そこには沙漠もあれば、嶮しい山々も連つて居るし、氣候も大變にわるいのですから、その旅行の困難はいふまでもありません。今まで人のやらなかつた此の冒險旅行は、かういふ地理的の苦みの上に、更に匈奴の勢力の及んだ地方を通るのですから、その危險も一通りではなかつたでせう。この冒險的な使に、自ら進んで當つた人を張騫といひます。西洋紀元前一三九年に首府の長安を立つて、西に向ひましたところ、途中で匈奴につかまり、十年ばかりも捕虜とされましたが、やつと免れて苦心の末やつと目ざす大月氏に着き、使命を傳へることが出來ました。然しこのさん〳〵な苦みのあげくの願ひにも拘らず、大月氏は應じてくれませんので、仕方なく〳〵また本國への、つらい旅をつゞけなければなりませんでした。一しよに出たのは、百餘人もありましたが、歸りついた時は、たつた二人となつてしまつたといふことです。

この大旅行は、其の目的は遂げられなかつたが、今まで不明であつた西方の國々の事情が、よく漢に知られたし、これがもとで西方の珍らしい品物も、輸入されることゝなり、それが漢の人々の生活

を豊にすることゝもなりました。皆さんの大好きな葡萄の如きも、かうした張騫の旅行のおみやげともいへるのです。葡萄酒もまた間もなく漢人の口に入りました。クローバー(苜蓿)の如き、胡瓜、胡桃、胡麻、みんなこの西からのおみやげです。なほ汗血馬などといふ名馬が三千頭も、その高い嘶をつゞけて西方から來て、武帝の廐につながれる、魔術使もはるばるやつて來て、長安で都の人々をよろこばしました。なほギリシア方面のすぐれた美術上の意匠なども、次第に漢に傳へられることゝなつたとも申します。

さて張騫の使に出てゐた間も、武帝は決して匈奴のことをすておいたのではなく、將軍を出して之れを討たせもしましたが、張騫の歸つた後には、大軍を發して大いに之れを破り、ゴビの沙漠の北



に遠く擊退して、漢民族は一時その大勝利を祝ひました。それから張騫は西域の國の烏孫といふのに出かけて、この國はじめ多くの西方の國々に、漢へ貢を納めることを誓はせました。

なほ武帝はこの北と西とに、勢力を伸した他に、東では今の朝鮮半島の北にあつた朝鮮國を滅して領土に加へ、南では今のフランス領印度支那にも手をのばしました。かうして漢の領土となりその勢力の及んだ所を、地圖で御覽になれば、どんなに支那の領土が、前のときよりも廣くなつたかといふことが、おわかりになりませう。

不老の神藥

武帝はかう云ふ外國征伐の一方に、學問や文學にも注意しました。董仲舒といふ學者の說をきいて、武帝は儒學を以て、政治や教育の方針を定めました。支那で儒學が國家の政治や教育と、密接な關係を有つやうになつたのは、此の時からのことです。帝自身も有名な詩を作りましたが、史記の著者たる大歷史家の司馬遷や、多くの美しい文章を書いた司馬相如も出ました。また東方策といふ人は、文章も上手として知られて居ましたが、いろ〳〵の滑稽をもつて宮中を賑はし、そのうちによく帝を諫めて、その惡を改めさせたといふことです。武帝もかの始皇帝のやうに、不老不死を願ひ、方士の言に迷つて、澤山な費用をつかつたり、仙人に逢ふため、神藥を作るためには、馬鹿々々しいやうな建物をも、やたらに造り

ました。皇帝のかういふ迷信は、いろ〳〵なわるい事が、宮中で流行するもとゝもなり、遂には皇太子を殺すにさへ至りました。

こんなことで非常な無駄づかひをしました上、前にいつたやうな度々の戰爭が、また大變な費用をかけましたから、さしもの國の富も殘りなく、その補は民間からとらなければなりませんでした。それで稅も高くする、新しい稅もふやす、或は賣官といつて金ををさめたものには、官職を授けることや、その他の種々なことを考へ出しました。然し何れにしても、民から搾り取るのですから、人民の不平はだん〳〵高くなり、恨も重なつて來ました。人民のかういふ樣子を見て、その結果の恐ろしいことを察しましたから、帝は詔を發して民をなだめ、無事にその治世を過ごすことを得ました。

なほ武帝の時に、初めて年號といふものがたてられました。これは前にいつた方士の說に基いて、其の御代のさいさきを壽ぐためにしたのです。これがもとで代々めでたい名を選び、いやな事が起れば、すぐ改めることゝもなりました。（さうして今に至るまで我が國さへも其の影響を受けて居るのであります。）

武帝から二代目の宣帝は、內は民治に心をつくし外は匈奴を破り、西域の國々をも服して、西域都護府を設けました。また帝が宮中の麒麟閣に、文武の功名の肖像を描かせたことは、名高い話です。

美人の嘆き

次の元帝のときに匈奴は南北に分れて、爭をしましたが、その南の方の酋長は漢に援をたのみ、なほ其の身の安全を謀ることから、

結婚をも許されたいと願つた。前にも一寸いひましたやうに、今までにも外國から漢の内親王を、妻にと願つて來たことは時々ありました。元帝はこの南の酋長をなつけて、北と爭はせておくことは、漢にとつては都合のいゝことゆゑ、これを保護してやりました。さて誰をその匈奴の王の妻にやらうか――これには少しこまりました。が宮中の女官の中から、一番醜いものを選ぶことにしました。

支那では後宮（婦人たちは建物の一番奥の部分に居るから、かういふのです。）の美姫三千などといつて、天子に仕へるものだけでも大變な數です。漢の時もさうですが、その宮女を宮中に召されたときには、宮中のお抱への畫家が、その姿を寫したのださうです。それでどんなおたふくでも、みんな美しくかいてもらはうと、畫家に賄賂をやつて、甘く美人になりすましました。たゞひとり王昭君といふほんとうの美人だけは、そんなことをしませんでしたゝめに、醜い姿にかゝれました。その繪姿が帝の目に觸れたので、この女を遣はせといふことになりました。お暇乞をしに來た王昭君の美しい姿に、元帝は驚きもし、惜しくもなつたといふことですが、約束は破ることが出來ません。王昭君は馬上に琵琶をかゝへて遠く北への旅に上つたと申します。さうして蒙古の地に天幕を家とし、慣れぬ生活の中にも、常に漢を慕ひながら、その氣の毒な一生を送りました。その墓には其の周圍の樣子と違つていつも青々とした草が生えるといひ傳へて居ります。王昭君が北への旅の姿は、支那では詩にも畫にも、よく題材

とされます。

軍用飛行機

その中に漢の皇室では、外戚の王氏の一家が勢力を振ひ出し、平帝の時には、王莽が攝政となりました。此の人は表むきは儉約謙遜にして、周の昔のやうな善政を行ふことをいひふらし、實はなかなかずるい政治家で、いろ〳〵と小刀細工をして人望を集め、皇帝の位をねらつて居たのでした。其の頃の支那には、未來記とか豫言とかいふものが、大變に信じられて居ましたので、王莽は自分の手下にいひつけて、自分の評判の高くなるやうなことを、しくませました。その上手なやり方や、學問があることに感心した連中は、王莽の學德を讃美して漢の朝廷に書を上つたものが、四十八萬五千百七十人もあつたといふことです。こんなふうになつて來ると、へつらふ者も出て來まして、ある井から白い石が出たが、それには「王莽が皇帝になる」と書いてあつたなどと上奏するものもありました。で遂に王莽はその豫言を實行して、漢の皇帝を廢して自ら帝位につき、國の名も新とつけました。それは西洋曆の八年の事です。（これから何年何十年などと記すのは、すべて西洋曆を略したものと思つて下さい。）

新といふのは、政治上に新しいことをしやうといふ意氣込みを示したものでしたが、（尤も王莽は初め新都侯に封せられたから、その新をとつて國名としたのです。）その新政がまことにめちやくちやで、人民の迷惑は一通りでなく、前の讃美者は、今はもう不平たら〳〵になりました。殊に貨幣などは澤山の種類を

出しましたが、その相場を勝手にどん〳〵かへきましたから、元來かういふ方面に、鋭敏な漢民族は、王莽の政治を呪ふやうになりました。

このときまた匈奴の侵入も始りましたが、王莽は前に申したやうな人ですから、匈奴を征伐するには、何か新しい方法でやりたいと思ひ、天下に令して、兵器兵術の新式なものを募りました。其の中に「一日によく千里を飛んで、敵狀をうかゞふことが出來る」といふ、兵器の發明者がありましたので、早速それを採用しました。これは鳥の形に作つたものゝ上に乘つて、始めは凧のやうに綱であげてもらひ、それから機械のしかけで動くものであつたらしいのです。いよ〳〵それをやつて見ると、數十間飛んだころ、つひに墜落したと傳へられて居ます。失敗ではありましたが、恐らくこれが世界最初の飛行機で、さうしてまた恐らく世界最初の墜落の記錄でせう。

さて匈奴征伐も思ふやうにならず、國内には方々にむほん人が出て來る。王莽に倒された漢の一族の劉秀は、このとき復讐を企てまして、とう〳〵二十三年新を滅して、また漢の皇室を再興し、都を洛陽にさだめました。この劉秀を後漢の光武帝と申します。

漢はかういふ風に前後の二期になりますので、王莽以前を前漢。光武帝からを後漢といひます。又その首府の位置から前を西漢、後を東漢ともいひます。

三　ローマへの道

——後漢の時代——

佛陀の福音

光武帝は天下の騒ぎを鎭めてから、王莽のときのわるい氣風を除いて、節義を尙ぶことを養成することにつとめました。次の明帝も民政に心をつくした方でしたが、その御世に支那の信仰の上の重要なことが起りました。それは佛教の傳はつたことです。

佛教はインドの釋迦が始めたものであることは、申すまでもありません。釋迦は孔子よりも少し前にインドの一城主の王子として生れ、何不自由なく、此の世の樂みも喜びをも、味はふことが出來ましたが、つく〳〵人間の世には苦の多いことや、また人々がその苦みにわづらはされてる有樣を見て、之れから免れ、之れを救はうとされた。それで王者となるべき身分をもすてゝ山に入り、聖者についたり、獨り思案したりして、つひに覺を開き、今までインドにあつた宗教の他に、別の新しいものを唱へ出したのです。

此の佛教は後にインドの北の中央アジア地方にも、南は海をこえてセイロン島にも傳はりました。さうしてそれがさらに東して、前漢の終り頃には、支那にも知られたのです。然し有名な物語りは、明帝があるとき、西方に功德あらたかな神のあることを夢みて、佛陀の教のあることを知り、そこで使を大月氏國に出して、お經

や佛像を得、僧侶を伴ひ歸つたことです。その僧侶たちは洛陽の白馬寺といふのに居て、經文を支那文に譯したり布教したりしたといふことです。

それから次第に西の方から僧侶も來ることが多くなり、布教も盛になれば、信者もふえて來ました。さうしてずつと後にはなりますが、朝鮮にもそれからまた日本にもひろまつたのです。佛教は支那人の信仰の上ばかりでなく、その藝術の上に影響したことは非常なものでした。それはあとで申しませう。

明帝のつぎの章帝も、よく人民の苦を察して、いゝ政をしましたので、天下は太平を樂みました。

紙の發明

支那では早くから文字もつくられ、書物も出來たことは、前からの話でお分りになりましたでせうが、さういふ書物を私たちが、普通に見るものゝやうにお考へになつたら大間違であります。いま私共が考へるやうな紙は、當時まだ支那にはありませんでした。文明を誇る西洋にだつて、ありはしなかつたのです。

それなら支那の書物は、どんなものであつたかと申しますと、その頁は竹片です。竹を短冊形に割り、火に炙つてあぶらをぬいて使つたのを、簡といひます。これに金屬の筆でほりつけたこともありませう。後に墨や毛筆が發明されてからは、それをも使ひま

した。さういふ頁は麻糸か鞣でくゝられたのです。書物を數へるのに、一卷二卷などといふのは此のためです。また木片を用ゐたこともありますし、帛卽ち絹を使つたこともあります。歷史に名を傳へることを「名を竹帛に垂る」などといふのも、かういふ事實から出來たのであります。

さういふものが、紙の役目をして居ましたが、竹や木の不便はいふまでもありません、絹も價が高くて實用的ではありません。それでもつと便利なものゝ發明には、どんなに多くの人々が、苦心をしたでせう。それはもとより少しも記されては居ませんが、この後漢の和帝のとき元興元年（西洋暦では一〇五年、日本では日本武尊の出られた景行天皇の御世）に、宦官（宮中の女官の監督をする人）の蔡倫といふ人が、とう〳〵一つの發明に成功しました。この紙は樹皮や古い麻布などを煮とかし、それを漉いて作つたのです。これは今日普通に考へる紙の形式よりも、或は布に近かつたものであるかも知れませんが、この製紙法の發明は、非常な惠を人々に與へたものであつたことは、いふまでもありません。

これからいろ〳〵の改良が企てられて、多くの種類の紙が、時代の下るまゝにつくられて來ました。さうしてそれはずつと後のことにはなりますが、唐の時代に、サラセンといふアラビア人の國に傳はり、そこでまた改良があり、更にそれがヨーロッパに入りました。ヨーロッパで、又々改良が加へられて、つひに今日の西洋紙となつたのです。それゆゑ、西洋紙、西洋紙とは申しますが、その先祖をだん〳〵調べて見ると、それは支那人の千八百年も昔の大發

明が、もとになつて居ることは、驚くべきことではありませんか。」

ローマへの道

この後漢の初めに、匈奴は又々その勢をもり返して來まして、西域の國々を征服することもに、漢の領土をも荒らしました。その中に匈奴はまた南北に分れて爭を始めたので、漢は南方を保護し、兵を遣はして北匈奴を討ち、大いに之れを破りました。さうした上で、一方には班超といふ人をして、西方の國々の平定をさせました。班超は僅か卅六人の勇士と共に、その使の道に上り、まづ鄯善といふ國に行きました。その國王は初めは之れを優待しましたが、匈奴の使者が來てから、態度をかへたので、班超は怒つて一夜匈奴の使者を襲ひ殺し、國王を驚かして漢に降參させました。それから他の國々をも勢に乘じて次ぎ〳〵に從へ、つひにまた昔の西域都護を置くことゝしました。

班超は西域のことに力をつくし、止まること前後三十一年、よく西方の外民族の心を服しました。が何分にも血氣の壯年で故郷を去つたきりで、白髮の老翁となりましたので、都こひしい心にはうちかてません、勅許を得て歸朝しました。その滯在中の一つの重大な仕事は、西方のローマ(當時支那では大秦といふ名でよびました)に、使を出して交通を開かうとしたことです。此の使者は、はる〳〵と長い旅を西へつゞけて、ペルシア灣の岸まで行きましたが、更に西への航海の困難をきかされて、やむを得ず引き返へしま

班超の兄、班固は、歴史家(漢書の著者)として名高く、妹、班昭(曹大家)も、また文名がありました。

した。それは此の國の豐であり、金銀や夜光の珠や、珊瑚その他の珍奇のものに富むといふことが知られて居たから、貿易の利を收めやうとしたのでした。この旅行はかく目的を達することは出來ませんでしたが、然しなほ支那人の地理上の知識を、更に廣めさせたのも事實であり、又とにかく西方の貨物を輸入する道をも開きました。

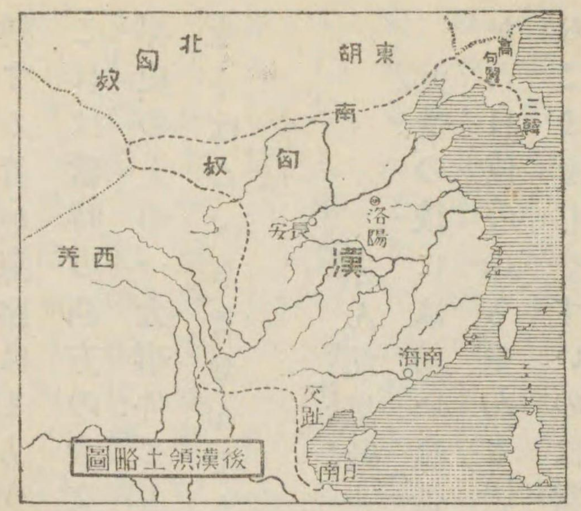
又ローマの方では、昔から支那の國の絹を、大へんに珍重して居ましたので、その絹は黃金と目方を同じに、取引きされたといふことです。なほヨーロッパの古い地理書などには、支那のことを絹の國、蠶の國などと、呼んだこともある位です。それで支那に使を出さうとしたこともあつたさうですが、とかく邪魔があつて、甘く行きませんでしたが、後漢の末には、ローマ皇帝（マルクス・オウレリウス・アントニウス）の使と稱する者が、海路はるゝ支那の南方に來て、交通を求めました。これは當時の西方の大文明國と、東方のそれとの握手であつて、世界史の上の一大事件とも申されませう。たゞそれは不幸にして永くはつゞきませんでした。

赤ん坊皇帝

元帝の後には幼い皇帝がつゞきました。中には生れてから僅か百日位の赤ちやんも居ました。かうなると外戚の人々が、勝手なことをしやすいのは當り前のことで、中にも梁氏といふのが、一番はびこつて來ました。桓帝は、其の餘りに我がまゝであるのを

怒つて、宦官と相談し、兵力を以て之れを倒し、その一族の家財は沒收して、せり賣にしたところ、その賣上げ金は、その年の租稅を半分にへらしてもいゝ程であつたといふことです。

然し此の事件のために、宦官は政治上にその勢力を振ふやうになりました。



後漢領土略圖

たので、漢は一難去つてまた一難といふ氣の毒な有樣に陷りました。宦官はもと〳〵宮中の女官の取締をする、輕い役人でありましたが、天子の側近く仕へる關係から、前にもあつたやうに、とかく政治に口を入れることが出來たのであります。（これから後も支那では此の宦官といふものがずゐぶん政治上にいろ〳〵な事をしたことがあります。）

餘りに宦官が勝手なことを始め出しましたので、官吏や學者の中には、その政治のやり方を攻擊するものが起りました。宦官はかういふ人々を壓迫し、或は殺し或は牢屋にぶちこんで、その安全を謀らうとしました。

それで正義をいひ立てゝ、惡人を除かうとすれば、皆ひどい目にあふといふのですから、人心は平和を得ることが出來ません。これはまた野心家の、事をたくらむには都合のいゝ時です。まづ張角といふものが數萬の徒黨をあつめて、一騷動を起しました。これは黃色の巾をつけて、其の印として居ましたから、黃巾の賊といい

はれます。張角はその後間もなく死にましたが、部下は各地に散らばつて騒ぎを起しました。さういふ動揺に乗じて、袁紹といふものが、兵を率ゐて宮中に亂入し、宦官をみな殺しにして、皇室の安全をはかつたこともありました。

そのとき董卓といふものが出て來て、袁紹の勢力を破り、獻帝といふ天子を立てました。董卓は一族をみな大官につけ財産もつくり、これで甘く行けば皇帝の位を奪はう、しくじつても、この財産で安樂に暮さうと、虫のいゝことを考へましたが、さうは問屋でおろしません、部下に殺されてしまひました。この人は大へん肥つて居たので、いたづら者がそのお臍に火を置いたら、日中からあけ方まで、とぼつて居たといふ話があります。

その後には詩人で武將の曹操といふ人が、獻帝をもり立てゝ、北方の勢力となり、之れに對して孫權や劉備が出てまゐりました。さうして後漢の天子は、ちようど渦の中にまきこまれた藁屑のやうに、たゞこの連中のつくる渦のまゝに、動かされるより仕方がありませんでした。

曹操は最も力が強かつたから、南方を併せて統一をしやうと考へ、水軍を率ゐて揚子江を下り、孫權へ手紙を出して、「海軍八十萬をつれて、あなたの御領地で獵を致します」と申し送つた。これは戰爭をほのめかしたのであります。これに先つて孫權は、劉備と同盟がしてありましたから、部下の驚きにもかゝはらず、戰備をとゝのへ、劉備の軍と力を併はせて揚子江の中流の赤壁（今の武昌の附近）の下に

之れを防ぎ、謀を設けて、曹操の軍船を燒きうちにして大勝利を得ました。（これは二〇八年のこと。日本では應神天皇の御世の初め）これから此の三つの勢力は、お互に結んだり、離れたりして相爭つて、十數年をすごしました。」

四　北方の嵐

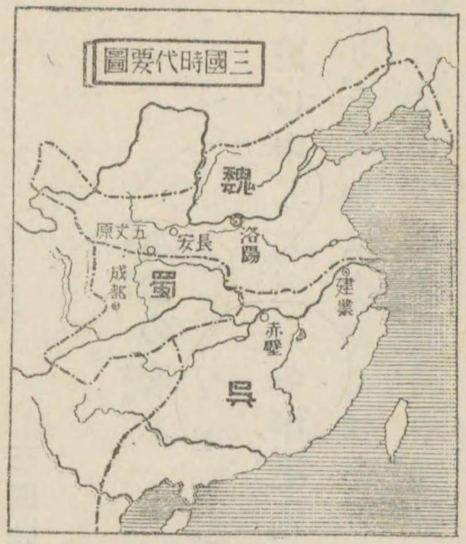
——三國時代から兩晋南北朝時代——

水魚の交り

——三國時代——

前に申した三人の中、劉備は今の四川省方面に、その根據地をつくり、その地は小さくはありましたが、智謀にすぐれた諸葛亮（字は孔明）と、武勇ならびなき關羽や張飛の如き武將を得て、北の曹操や東の孫權に對抗することが出來ました。その中に曹操の子の丕が後漢を滅して、自ら天子と稱し、國を魏と號しました。これは二二〇年

のこと。劉備はもと漢の皇室の子孫だといひふらして居たものですから、自らそのあとをつぐと稱して、漢の皇帝の卽位式を成都（四川省成都）で行ひました。（この國を蜀とも蜀漢ともいひます。蜀とは四川省のことです）それから間もなく、孫權もまた皇帝を稱し、首府を建業（今の南京）にさだめました。かく三つの國が出來て、力を爭ひましたから、これから晉の統一までを三國の時代といひます。



蜀の國の政につとめた諸葛孔明は、もと世の亂を避けて田舍にかくれて居たのを、劉備が尋ねて、その力をかしてと賴み、一度二度ならず、三度までも願ひに行つたので、劉備のために骨を折ることゝなつた人で、劉備は「自分が孔明の援を得たのは、魚が水を得たやうなものだ」と、感謝してゐたといふことです。孔明は內に政をとゝのへると共に、その德望を以て南方の外民族をも征服して、國境の憂を絕ち、國勢を張ることにつとめました。劉備の死ぬ時には、「若し我が子にどうにか皇帝たるねうちがあるなら、どうか輔けてやつて下さい。さもなければ君が代つて位を取り給へ」と遺言した。孔明は涙を流して、その有り難い言葉に感謝しましたが、自分はあくまで幼主のために、忠實をつくしますと誓ひました。

孔明はかくてこの幼帝を輔けて、一層內外の國務につとめましたが、魏を伐つときの上奏文（出師の表といひます）の如きは、之れを讀んで泣かぬ

ものは人でないといはれた位に、一言一句、まごころを以てつゞられたものでした。魏を討ちに出ては、智をねり謀をめぐらして、敵の大軍を屢なやましましたが、五丈原といふ所で、魏と對陣中、その智謀も忠實もいかんともしがたく、病のために、死の手にさらはれてしまひました。

この魏の征伐のとき魏の大將の司馬懿は、大軍をもちながら、孔明の智謀に恐れをいだいて、男らしく思ひ切つて戰はうとする勇氣もない。そこで孔明は、或るとき女のかぶる頭巾を贈つて、「どうです、お似合ひになりますか」と、ひやかしたこともあります。孔明が死んだと聞いたから大よろこび、すぐさま進軍を命じました。ところが蜀の方では、その死んだ孔明を、さも生きてるやうによそほはせて、戰車に載せて向はせましたから、さては一ぱいくはされたかと、魏の兵は恐れあわてゝ、逃げたといふ滑稽な話もあります。蜀は孔明によつて其の國がもつて居たやうなものでありますから、その支へ柱がなくなると心細くなりました。その後、魏はとう〳〵蜀を滅してしまひました。二六三年のこと　そこで三國の爭は變じて魏と吳との攻爭となりました。

ところが其の魏では、かういふ戰爭に、功のあつた司馬氏一家が權力をふるひ、司馬炎といふ人は、つひに皇帝の位を奪つて自ら天子となり、國を晉と號しました。この人は晉の武帝です。そこで今度は晉と吳とが、相爭ふことゝなりましたが、晉は吳の國の衰へたのに乘じて、兵を南に下して之れを滅し、八十餘年の紛亂をしづ

めて、再び統一の政治をすることゝなりました。

竹林の七賢

—西晉時代—

晉の武帝は、一族をそれ〴〵大名にして、皇室に萬一の事のあつた時には、その守りが出來るやうに、厚く待遇しました。がそれは却つて諸大名を我がまゝにさせることゝなり、武帝の死後には、そのため八大名が代る代る出て來て、首府の洛陽で戰を始め、政權の爭奪をしました。こんな騷動は、晉を強くすることの出來なかつたこと、申すまでもありません。武帝はまた天下の統一を遂げた上は、まづ安心と、兵備をゆるめました。これも國を危くするもとであつたこと、いふまでもありません。

そんな風に、政治上、軍事上から、國のみだれたり、よわつたりする原因があつたところに、清談といふわるい流行がありました。これは、國の爲めだの社會のためだのと、まじめになつて努力することを卑み、それよりは酒を飲み詩を作り音樂でもして、心のどかに日々をおくることを、大へん高尚のことゝして、尊んだ風習なのです。これは三國の頃から起りはじめて來ましたが、晉になつては、上下の流行病となり、大臣でも政をとることなどをよそに、いういうと遊んで、耻ともしないものもあるやうになりました。

この清談の仲間の中で、最も有名なもの七人がありまして、世に竹林の七賢といつて居ります。みんな酒が好きで、中には三斗で

始めて醉ふといふものもありました。外に出るときには、いつも僕に酒瓶をかつがせ、乃公が死んだら、これにいけてくれといつて居たものもあります。中には世の中の事務にまじめにつとめ、禮儀だの道德だのを說く者を罵つて、「世のいはゆる君子は、まるでヅボン下に居る虱のやうなものだ。虱は逃げるにも歩くにも、その縫目が尺度で、それでおれの行動進退は道にかなつてゐるといつたやうな樣子だが、それは君子がけちくさい行動をして、それで道德的だとうぬぼれて居るやうなものだ。然も一たび思はざる事件にでもあはうものなら、あわてゝしまつて何事も出來まい」などといつたものも居ります。

もと〳〵支那には、孔子のやうに、國家中心の政治を主張する者もあれば、一方にはさういふものを、馬鹿にしてかゝる考へ方も、古くからありました。堯の時代に居た許由といふ人は、堯から天下をゆづらうかといはれたとき、耳の汚れだといつて、川の水で耳を洗つたといふお話も傳へられて居ります。これは老子、莊子の思想や、此の清談などを喜ぶ人々に、共通な心持ちだつたのです。

さて此の他に、晉の厄介物であつたのは、匈奴です。匈奴は後漢の時に、全く其の勢を失ひましたが、降參したものは、長城の南に移り、漢の姓の劉を稱することを許されて、山西省の北部に住んで居ました。晉の時その酋長に劉淵といふ者が出ると、晉の內亂や兵備の薄くなつたのにつけこんで、其の勢力を張り、ついで其の子の聰は、兵を出して、晉を滅してしまひました。三一七年のこと。

北方の嵐

——東晋時代——

晋が亡びましたときに、其の一族は、南の建康（今の南京）で皇帝を稱し、其の後をつゞけることになりました。歴史の上では前の時代を西晋、これからを東晋といひます。（これは其の首府の方角からいつて、つけたものです。）これで漢民族の政治の中心が、揚子江の南にうつりました。さうして黄河の流域は、主なき土地となつて、北や西からの外民族のために開放されました。かね〳〵支那本部に、よりよき土地を求め、より高き生活を試みたいとねらつて居た外民族は、我れがちに、この空地に襲ひ來つたのであります。

さういふ外民族を支那では、五胡といつて居ます。五胡とは匈奴、羯（匈奴の同種）鮮卑（東胡民族の一派）氐、羌（チベット族共に）で、これらのものが、百五十年ばかりの間に、前後十六ばかりの國を建て、まことにめまぐるしい戰爭の繪巻を、くりひろげて行つたのでした。

さういふ北方の騒動は、氐種の建てた前秦の國の苻堅といふ王によつて、一まづ鎮められました。この苻堅を輔けて政をしたのは、王猛といふ賢臣でしたが、初めて王に見えた時には、ぼろをさげ虱をつぶしながら、天下の問題を論じたといふことです。王猛は苻堅が南の東晋を討たうとする野心のあるのを知つて、それは危険だと、いつも諫めて居ましたが、王猛が死にますと、王は勢に驅られて、南征の大軍を發しました。八十萬と號する大軍は、東晋を一

もみに、もみつぶすべく、くり出されましたが、淝水といふ所の戰で、必死を極めた東晉の軍に、もろくも敗られてしまひ、王は命からがら都の長安に逃げ歸りました。そこでまた多くの國が競ひ立ち、前秦はやがて滅ぼされて、北方には又々大嵐が起りました。

東晉は南下の大軍を擊退して、一いきつきましたが、其の安心が禍で、內亂がつゞいて起りました。さきに桓溫といふ大將の如きは、「男子と生れたからには、美名を百世の後にのこすことが出來なければ、いつそのこと、醜名でもいゝから傳へてやらう」といつて、むほんを企てました。それは成功しませんでしたが、こんな父をもちましたから、其の子は、どう〳〵國にそむいて自ら皇帝を稱し大亂をおこしました。かういふ亂を平げて功のあつた劉裕といふ將軍は、つひに東晉を滅して、宋といふ國を建てました。（これは四二〇年のことで、日本では第十九代の允恭天皇の御世。）

それからこの北に興亡した國々の王の中には、篤く佛教を信じた人も少くなく、寺塔を建てたり、えらい坊さんを西域から呼んで布教させたりしました。中でもインドから來た佛圖澄といふ僧は不思議な術をもつて、居て、幾日も幾日も食をとらないでも居られるし、目に見えぬ鬼神を使つて不思議を現はしたりしたといふことです。さういふ風に佛教が盛になりますと、インドに入つて巡禮をしたいと願ふ支那の僧侶も出ました。法顯といふ人の如きはそれで、長安から西に向つて、インドに入り、十數年の後、セイロン島から南洋を通つて歸朝しました。その旅行の苦みはいふまで

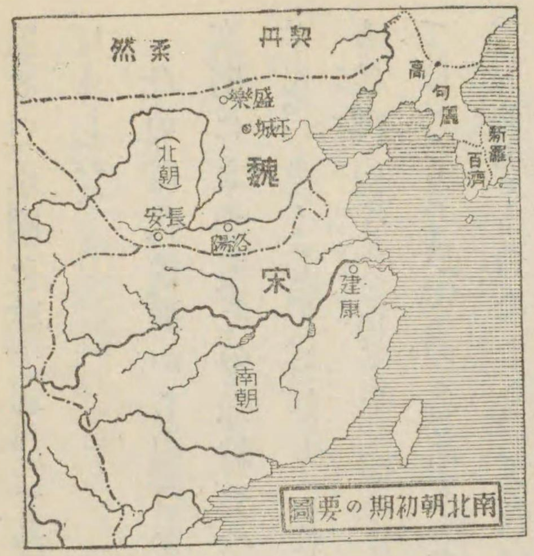
もありませんが、信仰の熱情はかういふ冒險をもやらせたのです。

索虜と島夷

――南北朝時代――

北の方では淝水の戰後の騷亂が、鮮卑民族の建てた後魏といふ國によつて平定され、支那には南の宋と、この後魏との對立が起りました。さうして南では宋の後に、南齊、梁、陳と三國が相ついで前の國を滅して立ち、北では後魏が東西に分れ、それから北齊、北周が興り、隋がこれに代り、其の隋がまた南北を統一することゝなります。その間約百五十年でした。この分立の時代を南北朝時代といひます。北方民族は、今の女の子のおさげの樣に、髪を編んで後に垂らしてゐるので、南朝の人は、之れを索虜と惡口をいひました。索を下げてる野蠻人といふことなのです。北方民族も南朝を野蠻人扱ひにして、島夷と呼びました。南の方は川や湖が多く、その地は島みたいだといふところから、島に住んでる野蠻人といつたのです。

さてこの南北に起つた國家の間には、戰爭もありましたし、北朝ではその上、新に北の蒙古地方に勢力を振つて來た柔然蒙古族とか、ついでは突厥トルコ民族とかいふ北方民族とも、戰をしたり和を結んだり、面倒があ



南北朝初期の要圖

りました。北周の國王の外戚の楊堅といふものが、北周を滅して隋といふ國を建て、やがて南朝の陳をも滅して、五八九年統一を遂げました。

此の時代は、前から引つゞいて入つて來た外民族が、支那の高い文明によつて、その知識や生活を向上したこと、いふまでもありません。さうしてどれもこれも、漢人風に同化して來ました。中にも後魏の孝文帝といふ人は、鮮卑民族の固有の服裝や、言葉を用ゐてはならない、その名前も支那人風にせよともいひ、更に漢民族との結婚をも命令しました。さういふ傾向もあつた一方には、北方の風習などが、いつとはなしに漢民族の中にも、行はれるといふこともありました。馬に乘ることは、この時分から盛になりました。

今までは室の中では座ぶとんみたいな敷物をしいて、床に坐る習慣でありましたものが、次第に椅子を用ゐて腰をかけるやうになつて來ました。これも外民族の感化だといはれて居ります。

それから南北どちらも、この時代は佛教が盛で、ひろく行はれました。皆さんのよく知つてるあの達磨は、この南朝の梁のときに、インドから海を渡つて來て、禪宗を傳へた名僧なのです。その影響のことは後でまたいひませう。それから道教といふ宗教が興つて來ました。この教は、支那に大昔からあつた山川などを崇拜する教や、その他いろ〳〵の迷信、まじなひや仙人の術などをよせ集めて、それを前にいひました老子の教にひきつけて、後漢の末に出來たものです。その後だん〳〵佛教の形式なども、とり入れて

來ましたが、北朝の初めになつて、すつかり立派な宗教となり、一時はまるで國教のやうな勢力を得ました。此の教では、修養によつて欲心を去り、災を避けて不老不死を理想とするのです。この教は實際に於いて、今日まで漢民族の信仰や道德の本ともなつてゐるものです。支那人のほんとうの心持を調べるには、この教をよく研究しなければなりません。

かういふ風に宗教は盛ではありましたが、人情は極めてあらく、北朝でも南朝でも、皇帝達が不幸な最期を遂げた者の多かつたことは、いかなる亂世にもまさつて居ます。北朝では二十六人の中十五人も殺され、南朝では二十四人の中十一人が同樣の運命にあつて居ます。

筆の力と信仰の熱

晉の時代から南北朝にかけては、支那は藝術の上に、いろ〳〵なすぐれた人々を生み出しました。詩人としては晉には陶淵明といふ人が最も有名です。ごくやさしい言葉の中に、豐な情味のある氣分をあらはしました。殊に役人などをして上役のものからくだらぬことをいはれるのを不快に思つて、そんなものはさらりとすてゝ故郷に歸り、自然を友として樂んだ文章や詩などは、よく日本人にも愛誦されて居ます。

それから繪畫も亦この時期の間に、非常に進歩したといはれて居ます。その第一の天才は晉の顧愷之といふ人ですが、その人の

かいたものといふのが(實際は摸寫ですが)、ロンドンの博物館の寶物となつて居ます。それは卷物で婦人の誡をかいたものです。風俗畫としても大へんに面白いものであります。またその形のうつし方を見れば、寫生的な點もうかゞはれますし、筆づかひを見れば、なか〳〵達者であつたことも、おもはれます。それからまた一方には、畫のかき方などについての、理論をいふことも盛になつて、後世の東洋の畫の標準となる筆法や、表現法のことが定められました。

此の繪畫と並んで、支那では書道といふものが、立派な美術とされますが、これも晉のときに王羲之といふ天才が現はれて、後世に大きい影響を與へました。あとでいふ唐の太宗は、この人の書いた蘭亭記といふのを、やつと手に入れて非常に喜ばれ、そのときの有名な書家に之れをうつさせ、ほんものは此の世に殘しておくのが惜しくて、自分の死ぬとき陵の中に葬らせたといふことです。それほどですから、其の肉筆の書などは有りませんが、その眞筆を想像することの出來るものが、幸に日本に傳へられて居ます。この時分の書で、筆で書かれたものは、少しゝかありませんが、石にほりつけたものは、方々に殘されて居ます。支那では、皇帝や賢臣のてがら、佛教のお經や儒學の經書の文句などを、石にほりつけて、後に殘すことが、古くから行はれて居ました。さういふものゝ中で、文字も立派であり、大仕掛のものが、此の時代につくられました。その一つは、支那で一番神聖な山とされてゐる、山東省の泰山にあ

ります。それは河床のやうになつてゐる谷間の石に、金剛經といふお經の言葉を、一字の大きさは一尺五寸四方位で、二千餘字もほりつけたものです。（今のこつてゐるのは九百字餘だといひます）かういふ大きい仕事をしたが、それは誰がやつたのか、名前も殘して居りません。その他、山の崖になつた岩などに、彫りつけたものは、方々に見出されます。かういふ石刻の文字は、人々によつて形の上には多少の違ひがあり、又うまいまづいもありますが、大體に於いて、筆力はつよく、やたらに手先の細工をしないで、ほんとうに、すなほな心持ち、そのまゝを出してゐることで、書を習ふ人には非常な參考となつて居ます。よく六朝風の書體などといひますのは、これらをひつくるめて呼ぶ名なのであります。

前にもいつたやうに佛教が盛であつたゝめ、寺を建て塔を造り、佛像の彫刻をすることなども、此の時は非常に發達しました。さうして今日まで殘つて居て、當時の人々の美しい心と、すぐれた技術を示してくれるものは彫刻です。彫刻は後魏の時代のものが、最も澤山に見られます。山西省の雲崗、河南省の龍門、甘肅省の敦煌などいふ所にある石窟に、其の代表的のものが見られます。雲崗のは自然の岩山の中腹に、東西十町近くにわたつて、大小いろいろの窟があります。そこに大きいのは五十尺またはそれ以上と思はれる石佛をくり出してあるし、壁には何百何千といふ數へ切れない程の佛體をほりつけてあります。また釋迦の傳記なども、浮彫とされたのもあります。この澤山の佛像のつくり人は何人

あつたか分りません。またその時代もざつと五十年ばかりにわたる間ですから、技術にはちがひもありますが、その仕事はすべて、強い信仰心から來たのです。其の最も大きいのは五つありますが、それは後魏の皇帝が、祖先の後世を弔ふために、造らせたものと傳へられて居ます。その他の大小無數のものは、人民がそれにならつて、なき親や兄弟や夫や妻子のために、佛陀の惠を願ふために造つたのが多いといふことです。

かうした石の窟をつくることは、もとインドに起つたのを、支那でもまねたのであります。從つてインドの美術のかたが、そこにも現れてゐることがみとめられます。かういふ後魏時代の彫刻の樣式は、朝鮮につたはり、それから日本にも入つて來ました。推古天皇時代の日本の彫刻は、此れが本になつたものであります。

書にしても彫刻にしても、此の時代の美術は、その當時の天才のすぐれた腕まへと強い信仰の、つゝしみ深かつた心もちとで、出來上つてゐます。そこには美しい優しい、或はつよい氣持ちがたゞよつて居ます。かういふものはたゞ骨董いぢりといふだけの老人や、物ずきの人々のおもちやにのみまかせるのは、餘りにもつたいないのです。

五　太陽の輝き

——隋と唐との時代——

大運河

南北朝の爭ひを隋が一つにまとめたことは、さきに申しましたが、その始めの文帝の次に、煬帝といふ天子が立ちました。この人はぜいたくなことが大好きで、立派な宮殿を建てる、大きな庭園をつくる、さうして珍らしい草や木や庭石から鳥獸などをも、國中からとりよせる、費用おかまひなしの勝手放題をしました。離宮の數は四十いくつとか申します。さういふ離宮を遊びまはるのに、馬車で行くのも面白くないと、船で行くことを考へました。それで黄河から揚子江の水をつゞけるために運河を開かせ、それに龍船といふ美しく飾つた船や、その他數萬の船を備へて、首府の長安から南の江都の離宮などへ往復しました。この運河は然しさういふ遊びのためばかりであつたとも、斷言は出來かねるので、之れで南方から穀物などを北に運ぶ上には、大へんな便利を得ることになつたのです。今の大運河といふ大切なものも、大體このときのものを後になほしたのであるといふことです。

煬帝は一方には政治の上にも注意して、法律などを改めもしましたし、外國の征伐には國威を輝かすことを忘れませんでした。自分では彼の秦の始皇帝や漢の武帝と肩をならべる氣で居たの

です。北方では南北朝の終ごろから、勢力を得て來て、北支那を脅した突厥種（トルコ種）といふ北方民族を征服して、其の侵入をとゞめました。北方巡幸の際に、其の酋長が來て、皇帝の萬歳を祝したときには、得意になつて詩をつくり、漢の天子もかうはいかなかつたらうと威張りました。南では今のフランス領印度支那半島の國々を征伐しますし、海を渡つては臺灣（その時分には流求といひました）を攻めて、其の土人を捕虜にしました。西の方の國々とは、商賣上の關係で交通を開くといふやうに、その威光を四方にはりました。さうして都では、それらの外國から使が來ると、いろ〳〵な藝當などを見せて、豐な生活の有樣を示し、町ではどの料理店にでも、勝手に飲食させて、代をとらせない。國が富んでゐるから、かうするのだと虛勢でおごろかしたといふことです。

日沒する處の天子

この煬帝のときは我が推古天皇の御代に當りました。攝政の聖德太子は、小野妹子を、此の皇帝の處へお遣しになつて、國と國とのおつきあひをはじめられました。それは六〇七年、推古天皇の十五年のことです。そのとき太子がお書きになつた國書が「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す、恙なきや」といふ文句で始められて居たのを見て、何分にも前申すやうな皇帝ですから、非常に不愉快な顏つきをして「野蠻人は禮儀を知らないからいかん」とぷん〳〵されたさうです。それでも翌年には日本への答禮

の使者が來ました。これが我が國と支那との公の交際をする始でありました。

さて煬帝は更に東の朝鮮半島の高句麗（日本でいふ三韓の百濟、新羅、高麗の高麗です。）の征伐を企てました。この征伐は前に父の文帝がやつて失敗したので、是非こんどはといふ意氣込みで、百萬といふ大軍を募り、帝自身も指揮の任に當つたが、大敗して逃げ歸る。直に再征の令を下して、軍人も兵糧をも徵發して、東へ遣はしました。かういふ戰爭には兵士の他その倍も人夫が、こき使はれましたが、さういふ人夫は疲れに疲れて、道ばたにばた〳〵たふれて死ぬといふむごい有樣でした。

かうした亂暴も、その軍隊が勝利を得られたら、或はいくらかよかつたかも知れませんが、引つゞく敗軍は、この皇帝の威嚴を傷けました、帝權の強さを疑はせました。そこで今まで煬帝を強い權力者として、何をされても我慢してゐた人民は、もうそのおもしをはねのけることが出來ると思ひましたから、たまりません。各地にむほん人が出て、皇帝の地位を奪はうと爭ひました。さういふ騷もよそに、煬帝は最も氣に入つた江都の離宮に、酒盛をして居ましたが、とう〳〵臣下の手に殺されました。殺されるまで、盃を口から離さなかつたと傳へられて居ります。

隋の滅びる頃に
江の南で楊が散れば
河北ぢや李が花ざかり

日沒する處の天子

といふ流行唄がはやりました。隋は楊といふ姓であつたので、それが倒されて、北の方で李といふものが興つて來るといふなぞでした。煬帝は李を目の敵にしましたが効なく、李を姓とした群雄の一人の李淵は、遂に隋に代つて皇帝となりました。これが唐の高祖なのです。

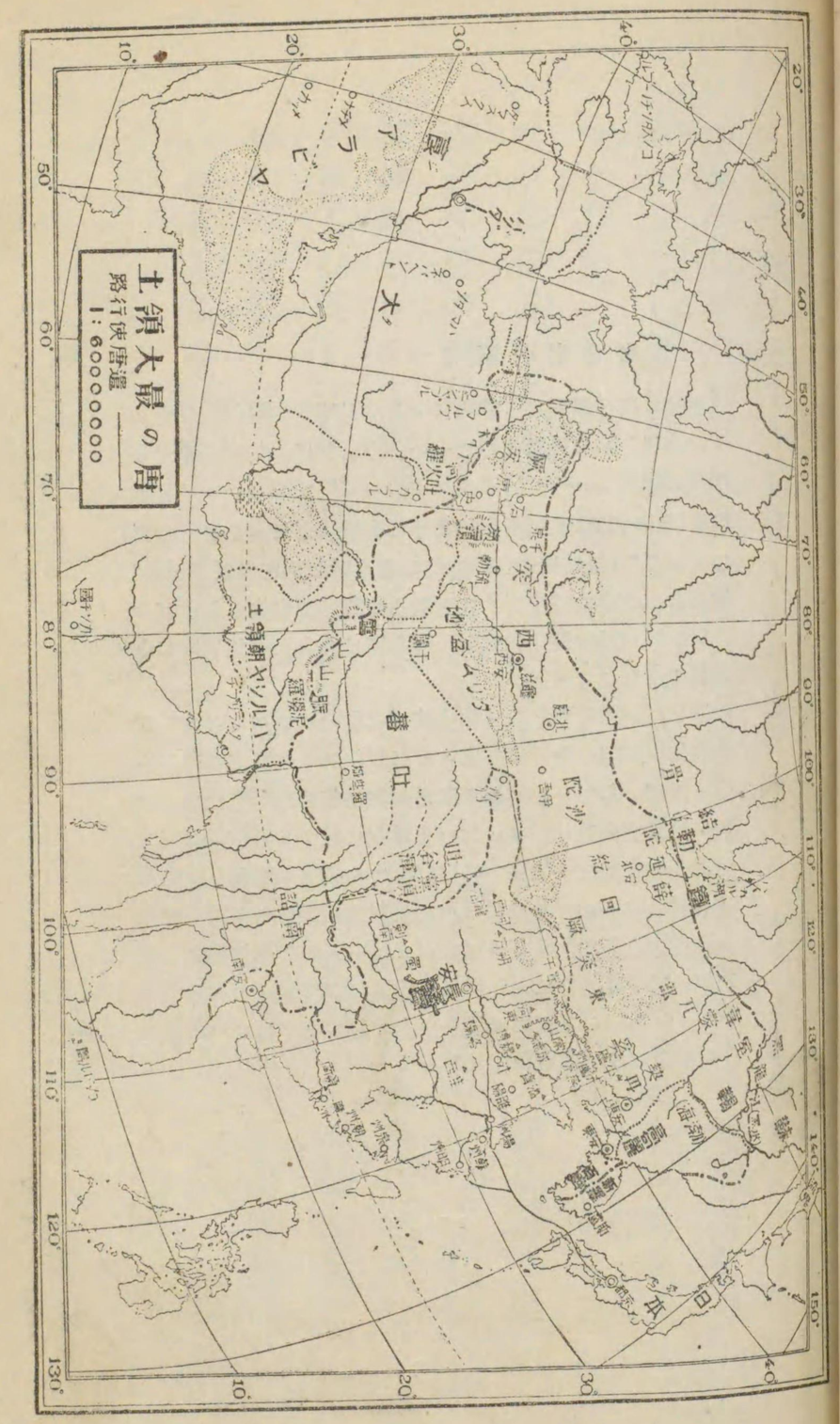
民は國の本

唐の時代は支那の歴史の四千年の間に、一番花々しい時代であり、我が日本にはとりわけいろ〳〵な關係があつた時であります。この國は第二代の太宗といふ天子のときに、すつかり其の土臺が出來ました。

太宗の御世はまことに平和で、支那式の形容では「道におちた物があつても拾つて持つて行つてしまふものもなく、夜は雨戸をしめないでも盗人は入らず、旅の商人などが野宿しても、危いことはなかつた」といつて居ります。これは太宗が常に「天子は國あつての天子、その國も民あつての國である。民こそは國の大本だ」と民をよくいたはる政治をされたゝめであるといはれてゐます。いい政治のためには、いゝ制度が必要です。唐の初にはいろ〳〵の役所にも、新しいきめをつくるし、學校のことも法律のことも、それぞれよりよく整へられました。國民の生活を安かにするために、は、均田の法を行つて、田地を人民に平等に使用させることをも謀りました。（皆さんのよく御存知の我が「大化の改新」の班田收授の

法の如きは、この均田法に關係があります）。かういふ善政には、房玄齡、杜如晦、魏徵などといふ名臣が、よく天子を輔佐いたしました。この名天子の立派な言行を書き記した貞觀政要（貞觀といふのは太宗の年號）といふ本は、昔の日本の政治家のいゝ教科書となつたといふことです。その次の高宗は父ほどのえらい人物ではありませんでしたが、それでもよく前代の盛な國運をうけつぎ、多くの賢臣の力によつて、外國征伐ではより以上の發展をさせました。

それで前に一寸いひました突厥は、此の二代の間にすつかり滅されて、北は蒙古、西は中央アジアの地まで、みな唐の支配を受けることゝなりました。チベットの民族も好を修めれば、インドとも交通する滿洲の地方からも貢をたてまつる。南方は今のフラン



唐の最大領土

この圖は唐の領土の一番ひろくなつた高宗（第三代）の時を主として、其の本國の境は……の線で示し、其の勢力の及んだ範圍は――であらはしました。それから◉印は都護府（六ヶ所）の所在地で、邊境の守備と政治とのために設けたもの、▲印は玄宗（第六代）以後の節度使所在地の記號。都護府は今の日本でいへば朝鮮や臺灣の總督府のやうなものです。これで唐の勢力が、北や西にいかに伸びて居たかを御承知になれませう。

首府は長安。本文でいふのを落した所もありましたが、此の長安は前漢も隋も皆、都とした地です。我が奈良朝や平安朝時代に於ける遣唐使や留學生留學僧等は、圖に示したやうな航路旅程で、多くはこの長安に向つたのでした。それから地圖はすべて、本文に於けるよりも餘計に人種の名や國の名をあげました。これは支那と他のアジアの地方との關係を一目でわからせるためでもあり、中等學校の教科書を見られる時にも、多少の參考になるだらうとの心や出來なかつたのは殘念でした。

ス領印度支那半島の果てからも使が來る。こうして東では朝鮮半島の百濟を始めに、ついで高句麗を滅して領土を增し、新羅を朝貢させるし、更に西は中央アジアをこえてペルシアをも一時は從へました。かういふ勢力の發展は支那の歷史に今まで見られなかつた事がらであります。さうしてこの四方からの使は、正月には必ず唐の朝廷に、よろこびを申入れる。皇帝はほんとうに其の時分知られたる世界のはてばてからの使節の上に、威儀いかめしき多くの臣下を從へて、その尊嚴を示したのです。その未知の土地からの數へつくされないいろいろ物には、いかばかりその當時の人々は、よろこびもしおどろきもしたことでせう。

老女の卽位

月でいへば滿月にも似たこの唐の世にも、暗い雲のかゝるのを、防ぐわけには行きませんでした。といふのはこの高宗はとかく病氣がちで、政を親しくとることがむづかしかつたので、皇后の武氏といふ人が、夫に代つて大臣たちの意見もきけば、命令もしました。それで人民は天后と申して、天子と同じく敬つてその命をきゝました。この皇后は非常な美人で、始めは太宗の宮中に仕へて居りましたが、後にとう〳〵高宗の皇后になつた方なのです。智慧もあり學問もあり、政治家としても立派な腕まへをもつて居ました。支那は婦人がいぢめられる國のやうに、誰しも思ひがちですが、實際はなか〳〵婦人の勢力はつよいのですし、又なか〳〵えらい婦人が、歷史の上にあらはれて來て、男子と腕くらべをしてもひけをとらないのがあります。漢のときの呂氏や、殊にこの武氏のやうなのは、その中でも第一の位置を占める人です。

高宗がなくなつたあと、皇子の中宗、それから睿宗と二人の皇帝を立てましたが、武氏はその睿宗をやめて、自ら皇帝の位を奪ひ、國の名を周と改めました。此のとき、武氏の年は六十七でした。則天武后といふのがこの人です。こんなお婆さんが、大きな支那の支配者になつたのですから、驚くではありませんか。それもあたり前に位についたのなら、まだしもですが、いはゞ皇帝の位を奪つたのですから、これに不平な唐の皇族や、その臣下のあつたのは、無理はありません。さういふ連中は片つぱしから殺させて、自分の